94
199

俳句入門叢書　第四編

内藤鳴雪著

春夏

芭蕉俳句評釋

東京　大學館　発行

緒言

一寒川鼠骨君一日來り談ぜられて曰く、貴老は既に「俳句獨習」を著して、今日吾々の俳句は元祿の蕉翁に始まり、蕉翁の俳句は純文學的俳句であると主張された。就ては其純文學的俳句だと云ふ證據を十分に擧示されねばなるまい。丁度今般大學館に於て「芭蕉俳句評釋」發行の企がある。是れ右を擧示さるべき好機會であるから是非其該評釋を擔當されい。余曰く、一應御尤、然し僕は淺學寡聞、且多忙生である。「俳句獨習」の如き自己の意見は單に自己の胸臆丈を說話すれば足る譯だが、他人の句解となると、其傳紀を知らねばならぬ、其句關係の故事も搜さねばならぬ、是れ僕が力の及ばぬ所である。殘念ながら御辭退申さう。鼠骨君は隙さず又曰く、其辯解は百も承知、拙者と雖も貴老が力の及ばぬ所を强

昭和
37 5 13
内交

ひは致さぬ。唯該評釋も「俳句獨習」と同じく、單に胸臆丈を說話せさるれば好いのだ。それで蕉翁の句の純文學的と否とは分かる筈。若し分からぬとならば、淺學寡聞の貴老が何故個樣なる大言を吐かれた歟、それが不審だ。殊に蕉翁の傳紀や其句關係の故事は從來諸家の註解に於て既に盡して居る。此上貴老を煩はす必要はない。又筆記の如きは例に依り拙者が仕らう、如何で御座ると。余は暫く打案じたが、決然答へて曰く、諾。是れ此書を著すことになつた所以である。

一此書は專ら俳諧一葉集發句の全卷を評釋したのであるが、其「寛文延寶天和年中」及「考證」の句を除いた。前者は所謂正風以前の句に係るが故、後者は眞僞未だ確ならざるが故である。

一評釋の目的は「俳句獨習」に伴ひ、主として初學者の爲めに純文學的俳句を示授するに在るのだから、やゝ造詣したる人より見ば煩瑣不要と感ずる點も多からう。是れ詮方がない。

一自己の胸臆を說話するとは云へ、句に依り其傳紀故事を知らねば解釋の出來ぬものもある。此場合は「芭蕉翁句解大成」等から智識を借りた。而して猶不了の事は疑問を存して同人の敎を仰ぐこととした。

一鼠骨君の筆記後尙訂正を要するものは余自ら筆を入れ、隨て文章の蕪雜支離を致した處も少くない。是れは鼠骨君の爲め特に辯明して置く。

述者識

春夏 芭蕉俳句評釋

内藤鳴雪述

春の部

春立つや新年古き米五升

芭蕉翁自身が新春に逢つた情懷を叙した句じや。春立つやとは其の出逢つた季節を言ひあらはしたので、此の春の立つ時分に我れには米五升ばかりを食ひ料として持つてゐる。其五升の米は既に暦の改まつた新年であるに、以前から持つてゐた古い米である。新玉の年であるから何事も新らしく又た豊かに準備せらるゝ場合であるのに佗人たる自分は唯だ是のみで新年に出逢つたといふたよりなく淋し

いやうな心持を叙したのである。而して裏面にはそれを自得して却つて興じてゐることは勿論じや。此句は貞享元祿以後のものとして一葉集に掲げられてあるが、春立つや新年云々と言つた句調と言ひ、又た新年に古きの取合せと言ひ、貞享以前の句であつて、芭蕉翁が正風を唱道した後の純然たる文學的の句とは思はれぬ。或ひはまだ舊口氣が殘つてゐたものでもあらうか。

庵に在りて

いく霜にこゝろ芭蕉の松かざり

前書の庵に在りてとは多分深川の庵にでも居つた時の句であらう。此句も亦た佗人の新年に逢つた情懷を叙したので、世の中の新年を見ると、大さうな注連飾を立てたり、種々樣々新年の儀式をやつたりしてゐるのに、吾庵には芭蕉があつて、幾年の霜を經てゐる、其の芭蕉か松飾の代りをしてゐると言つたのである。又た心ばせをとは一つのかけ言葉で、我が心ばせも此芭蕉と共に幾年の霜を凌ぎ松の操を慕つてゐる、即ち我が心ばせが芭蕉によつて表はされてゐると、いふやうな意味もあるのじや。此句も亦た前の句と同樣に貞享以前の口氣である。

山家迎春

誰婿ぞ齒朶に餅おふ丑のとし

此句の前書は作者が目擊の實況か或いは斯樣な題をまうけて作つたのか、何れともわからぬ。兎に角に山家の新年の有樣で、不圖看ると或人が齒朶と餅とを背に負うて居たので、其人は何處の婿であらうか、齒朶と餅とを負うて此丑年の始めを行きつあるといふ意味だ。元來此の牛は物を負はせる爲めに飼つて置く畜類であるから折ふし

丑年といふので人の齒孕と餅とを負うてゐるのを牛と見立てゝ少しくもぢつたやうな趣がある。婿といつたのは新年故の興じや。此句も亦た不相變正風の面影に乏しい。

伊勢か賣家にも來たり千代の春

新年を佗しく貧しく住つてゐるものゝ情懷を咏じた句で、千代の春とは新玉の目出たき春の事、現今では新年は冬季であるが、昔しは概ね春の初めであつたから新年と新春と同じやうな心持であつたのである。伊勢とは百人一首に出てゐる伊勢といふ女で、此女は歌の名人であつて一時は世にもてはやされ富貴に暮したのであつたが、後には次第に落魄して遂に其の住家も人に賣渡したといふ女である。其の歴史を藉り來つて伊勢が賣る其の賣家にも矢張り千代の春はやつて來たと言つたのである。表面は伊勢か賣家へ春か來たことになつて居るが、實は現在の世人殊に自分などを指したので、賣家にするやうな貧者の佗び住居へも千代の春は來る、四海同風まことに目出度いことじやと咏つたのである。伊勢といふ歴史上の人物を捉へ來つた爲めに多少感興を高め唯だ貧乏人の家といふよりも品致が出來てゐる。此句に至つて初めて正風の趣味があらはれて來た。

嵐雪か享たる正月小袖を着たれば

誰やらが姿に似たり今朝の春

嵐雪とは芭蕉翁の門人、その門人が自分に與へた正月小袖を着たから此句を讀むといふ前書。句の意味は自分の姿か今朝は常の自分でなく誰れか他の人の姿に似てゐるよ此春の始めの今朝はと打興じたのである。固より嵐雪に貰つたのであれば、嵐雪に似たと言つてもよいのじやがそれを嵐雪と直接に指さず、婉曲に誰れやらと言つた

ので面白くなつた。又身分不相應な美服を貰つたと挨拶の心持もある。

空の餘波をしまんと舊友の來りて酒興じけるに

元日の晝まで臥あけほの見はづして

二日にもぬかりはせじな花の春

年も最早晩に押つまつて今宵ばかりで再會の出來ぬ空であるから、其の空の名殘を惜まうと友人と集まつて酒を飲み興じて遂に夜おそく寢て元日の晝まで寢入り、初日出の空を見なかつたので此句を作るといふ前書である。年の名殘を惜むのを空の名殘を惜むといふのは景色にも渉り詩人の感想である。

花の春とは千代の春と前に言つたやうに、年の初の事をいふのである。年の初にはあまり花はない、なくても花といつて多少繁華の華

の字のやうな美しく盛んな心持を含ませた年の初を稱するのじや。此花の春であるから朝早起して曉の日出でも拜まうと思つてゐたのに、元日は既に寢過した、併し二日には決してぬからずと早く起き出て花の春の曙を見ようじやないかといふ意。二日にはと言ふ可きを二日にもと言つたのは修辭上のくつろぎで、元日も此通りしくじつた、二日にもさうかといふにイヤ決して左樣ではないといふやうな意味になつて、はとあるよりかも却つて趣味あるやうになるのじや。

たかき屋に上りて見ればの御製の有がたきを今も猶

叡慮にてにきはふ春の庭かまど

前書は仁德天皇の御歌を思ひやりて、難有き御仁德が今も尙ほ同樣じやといふ前書。此の歌が御製といふのは誤りであるさうなが、そ

れは此處に論ずる必要もあるまい。

叡慮は天子の思召、春の庭かまどは、一個も庭かまどじやが、こゝでは澤山の家々の庭竈と見なければならぬ。聖天子の思召にて千門萬戸が賑つてゐる即ち此の春の庭竈はといふ意で、自己も貧乏ながらも竈を持ちて仁恩德澤の下に春を迎へた、難有い御代であると歌つたのである。着想は別段の珍しみもなく平凡のやうであるが、一方よりいふと、個樣に太平の世を頌するには殊更に巧を弄ぶよりかも有の儘で珍らしくない事を穩かにうたふ方が却つて體を得てゐる。又た言葉に於ても調子に於ても巧妙なよりも莊重に穩健にする方が頌の體にかなふのである。

京ちかき所に年をとりて
こもをきてたれ人いますぞ花の春

こもを着てと言へば着物もなく、こもで寒さを防いでゐる事。その こもを着て誰れが居られるぞ花の春じやのに、誰れじやこもなど着て此の春を迎へた人はといふので、これも他人を誰れじやと言つたのでなく、自分の侘びて貧き乍らも京ちかき所に春を迎へたのを戯れて斯く咏じたのである。勿論是も貧乏なのを耻ぢたり悲んだりするのでなく、却つて其れに安んじ打興ずるので、いますの語などが殊にをかしい。

湖頭の無名庵に年を迎ふ時三日口を閉て題四日

大津繪の筆のはじめは何佛

前書は琵琶湖の邊りの無名庵で春を迎へた、三ヶ日の間は口を閉ぢて一句も作らなかつたが、四日に作つたといふ前書。題すとは詩を題すなどといふと同樣。句の意味は大津にて名物なるアノ大津畫を書

き始めたのは何といふ佛であるか、一種洒落な俗氣を離れた此の如き大津畫は決して人間の筆ではなからう、と又平の筆は態と知らぬ顔で斯くいつたのである。而して裏面には矢張自分が四日目に始めて句を題したといふことをほのめかして、俳道を以て自ら任じ、又自ら戯れてゐる心持もあるやうじや。勿論表面の言葉の上には斯樣な意味は少しも見えぬけれども、前書より推すると是非こゝまでは說き到らねばならぬ。而して此推定は古來芭蕉翁を崇拜するの餘り其句に何等の由緣りもない道德や禪學等を附會して種々の解說を加へる事とは大違で、全く文學範圍內に於て前後の事實上より已むを得ず言葉以外の觀察を下すのである。此の點は初學者のよく區別して心得て置くべき點である。尙又た無名庵だから何佛と言つたのじやと解する人もあらうが、それは餘り前後の照應がつき過ぎると思ふから余は贊成せぬ。

人も見ぬ春や鏡の裏の梅

昔の鏡の裏には彫刻があつて、梅とか南天とか鶴龜などが彫つてあつた。鏡の裏の梅とは其の事を言つたのであらう。他の草木は皆な人に見られて賞せられる、然るに鏡裏の梅は人も見ぬ春を獨り咲いてゐると言つたのである。表面は右の如く鏡裏の梅に同情を寄せたのであるが、裏面に於ては何となく自分等佗び人の生涯も梅花の如き美しき思想を持ち、風雅を貯へて居れども人には知れぬ、隱逸して世に遠かり獨樂むでゐるといふ意を多少含ませてゐるかと思ふ。即ち人も見ぬのを恨むのではなく却つて自愛する心持である。又見る見ぬとは鏡から來た言葉のかゝりである。

年々や猿に着せたる猿の面

年頭に或る猿曳の事を咏じたので、猿の面は猿の頭を作つたのでなく、猿に着せる爲め作つた面といふ意。年々歳々あひも替はらずアノ面を着せて猿曳か猿を舞はせてやつて來ることじやと言つたので。これ亦た客觀のみでなく、人事の年々歳々同じ趣じやといふ主觀を幾分か現はしてゐる。猿に着せたる猿の面とは語呂もよく、事柄も滑稽で一寸面白い句じや。

元日は田毎の日こそ戀しけれ

田毎は信州更科の谷に田が段々にあつて、一枚一枚の田に月が一ッ宛映ずる、それを田毎の月と言つたアノ田毎である。月を轉じて日として打興じて此句は出來た。秋は勿論田毎の月が見たいが、元日に於ては月よりも田毎の日が見たい。其日こそ戀しけれ。さぞめでたく美いことであらうと興じたのである。

蓬萊に聞かはや伊勢の初便

蓬萊は新年に三方の上へ種々の物を盛つて不老不死の目出度い蓬萊山の形ちに作つたもの。伊勢とは大神宮の祭つてある伊勢國である。新年に蓬萊を飾つて年始を祝つてゐる場合には何よりも先づ尊く目出度い伊勢の國の初便が聞きたく思はれる。聞きたいものじやといつたのである。蓬萊と神風の伊勢國、何となく調和がよい。伊勢の初便とは何か故事があるかも知れぬが、ソンナ事を穿鑿せずとも此句の詩趣味は充分である。

子日しに都へゆかむ友もがな

新年の初子の日には野山へ行き松を曳いて、千年の齡を壽く故事があつた。子日するとは右の子の日子に於て松を曳くといふ事、その松を曳きに都へ行く友もあらばよいのにといふ意である。何の巧み

もなくさら〳〵とした着想で芭蕉翁の胸懷が現はれて居る。巧を弄するは、却つて容易平淡中に趣味を訴へるのは老熟のものでなくば出來ぬ所である。此の句に於て元祿の氣風も大いに覗知られるやうになつて來た。

古畑に薺つみゆく男ども

これは客觀に此の景色を見て咏じたので、薺摘むは新年の儀式、それを摘みに人々が野邊を行きつゝある處を見た句。古畑は春の初めで未だ何も生ひ出です、去年作をした儘に荒れてさびしい畑のことで、其淋しい畑で薺を摘みゆく男どもがあるといつたのである。古畑といつたのが面白い、薺は新春の目出度いもの、それを古畑にて摘みゆくのは反對の配合じや。前にあつた新年古き米五升の句の如きは重もに言葉の上で古と新とを抽象的に配合させたから面白くなるが、こゝは薺摘むとふ新春の事實と古い畑の景色をも配合させたから面白いのである、反對の配合を用ふる場合に初心者の注意す可き事であらう。又た男どもと言ふのも、新年であれば乙女とか公達とかある可きを特にむくつけなる者を持つ來て却て古雅朴野なる趣が現はれ一寸面白い句である。

一とせに一度つまるゝ薺かな

薺は七日の節句の朝たゝいて粥に入れるので、一年に一度のものである。そこで一年に一度つまれる薺かなといつたのじやが、甚だ趣味が乏いやうな。且つ薺といふ事物につき氣顛をやつた傾きもある。後世或る派の氣顛や穿ちなどを好むに至つたのも蓋し此句などが其俑を作つたのであらう。

蒟蒻にけふは賣かつ若菜かな

上子の日に若菜の祝ひといふのがある。常はよく蒟蒻賣がやつて來て又たよく蒟蒻を買つて喰ふのじやが、此日は若菜〳〵と呼びありき又た自分も若菜を買つたといふやうな處より、今日は賣かつと言つたのらしい。特に蒟蒻といつたのは後拾遺集物の名の歌に、ここにやくまゝし若菜つむへく、といふがあるから取合せたのじやといふ解があるが何にしろ面白くない句。

風麥亭

春立つて未だ九日の野山かな

前書の風麥亭とは、强ひて風麥亭の事を句に作つたのでなくてもよい、作句した場所が風麥亭であると、前書に斯く書く事古來の習慣である。併し此句の場合は風麥亭の景色を叙したものとも見える。即ち多少野山の風景を見晴らす所であつたらしい。

其處で此句の意味は、春が立つて未だ九日にしかならぬ此野山の景色かなと打見た所を咏じたので、春尙ほ淺く冬枯の趣も殘りて何となく荒凉たる樣ながらも其内に何處か冬とは趣を異にして春めいてゐる所もあるといふやうな心持を含んでゐる。斯樣に概括的に叙して内容の情景を想像させるのも亦た一風の叙法であつて、且つ此句の如く大マカな着想は當時の氣風を徵する所もある。併し佳句とは云へぬ。

大日枝やしの字を引いて一かすみ

大日枝小日枝は何れも比叡山の嶺の名である。此景色は恐らく大津附近から見た春の景色であらう。大日枝を見ると霞か引いて嶺に横はつてゐる、それか恰かも平假名のしの字を引いた如くであると霞の形を形容したのである。且一休禪師が叡山でしの字を揮筆した惡

戯を思ひ寄せて特にしの字といつたとの解があるが、是は無論左樣であらう。

春なれや名もなき山の朝かすみ

これも春山の朝霞を見た時の情懷を叙した句で、實に春であるよ名もない山までがアノ通り朝霞を曳いて居る、平常は氣も止めず見て居た山たが、今朝の霞のさまは床しく眺められる、げにも春であるよといふ意である。此句も今日の眼より見ると平凡たるを免れない、且上五と中七とに理性的の關係が交つてゐる爲め詩的趣味に乏しい。

正月も美濃と近江や閏月

作者の旅行中の情況を咏じたもので、美濃と近江の間に旅をしてゐる、其時が正月から閏正月までゝあつたといふことを斯く言ひ做したのじや。悉しく云はゞ、正月も美濃と近江の間に彷徨してゐた、閏正月にも此間に彷徨してゐるといふので、正月と閏正月が續いてゐるのと美濃と近江が相隣つてゐる所と、此二つの似通ひたるをもぢくつて此着想を成したものと見える。多少口あひに似て正風以後の句としては穩かならぬと思ふ。

うくひすの笠落したる椿かな

庭前に椿の花が咲いてゐる、それに鶯が來てとまつた、椿の花がどうかした拍子に散り落ちた。其の落ちたのを鶯が落したものとし、花を鶯の笠だと言ひなして興じたので、椿の花は逆さに見ると笠に似てゐるからであらう。輕い滑稽で且つ頗る美しい趣もあり、氣に入つた句じや。

一言す可きは此句實際は鶯の笠でないものを笠だと斷定し實際に背

いた爲め詩興となつたのである。總て詩の要は眞を求めず專ら美を求め、美の爲めには眞を失つてもよいといふ事が此等を見ても分かるのである。又或る解に鶯の梅の花笠といふ歌が引いてあるが余はそんな典古はなくとも感興十分じや。

相國寺にて

黃鳥に感ある竹のはやしかな

京都の相國寺で作つた句。此寺は足利三代義滿の建立で其境內の竹林に定家卿の墓があるさうな。そこで作者が此の寺へ詣でると、折ふし鶯がないたが、その聲は竹林から出てゐたので、此鶯の鳴くにつけても一種の感情が竹の林に向つて起る、といふ意味である。即ち鶯聲から歌人が偲ばしくなつたのじや。

此句の前書は前の風麥亭の前書などと違つて句と離る可からざる關係を持つてゐる。事蹟を詳しく知らぬからかも知れぬが、兎に角餘り價のある句ではない。

鶯や柳のうしろ藪の前

閑居して鶯を聞くところの情況と見える。鶯かなく、或いは柳のうしろあたり、或いは藪の前の方と、あちこちで鳴く、黃鳥も樂しげで自分も娛しく共に此の遲日を暮してゐるといふやうな意じや。長閑な春の心も見えて面白い句である。此句の鶯は一羽か數羽かなどと穿鑿をせず、唯だホー法華經が彼方此方で聞えてゐると淡泊に見て置けば好からう。

黃鳥や餅に糞する椽の先

春の事なれば餅か椽先に干してあつた、偶〻鶯が來て其の餅の上へ糞をしたといふ意味で、鶯の無邪氣なのと家內の靜かであるさまも

見え、春の即事として面白い句じや。糞と言へば穢ないものじやが、それも斯樣に使用せば却つて美化されるので、殊に小鳥の糞であれば左程穢ないとも感じぬのみか餅へ糞したといふので一寸際立つた興を引く。此句は是迄の句と異なつて頗る纖巧な處もある。

ある人の草の戸を尋侍けるに、よそに出けるよしにて、年老たるをのこのひとり留守を守り居けるに、垣穂の梅さかりなりけるを、これなんあるしと言ひければ、かのをのこ隣の梅にてさふらふと申すに、いよ〳〵興うしなひて歸り侍るとて

留守に來て梅さへ餘所の垣根かな

前書は作者が或人の草庵を訪つれたのに不在で老年の男が一人留守番をしてゐて主人は他行だと言つた、然るに垣穂即ち垣根に梅が咲

いてゐるのを見たから、戯れにその梅こそ主人じやないかと言つたら老いたる男は何の感しもなくアレは隣の梅じやと言つたので、いよ〳〵興さめて歸るとき此句を咏じたといふ前書。句の意味は、留守に來た、セメて梅があるじかと見ればそれさへ隣の梅であつて餘所の垣根に咲いてゐるのじや、重ね〳〵失望したといふ意。元來主人が不在であつたのも一つの興、梅を見たのも一つの興で、又た其梅は隣りの物だと答へた留守番の老人の武骨なのも一つの興であるのに、前書に於て既に此の興を催さずして失望したとしてゐるのは芭蕉翁の風雅にも似合はぬ事である。從つて俳句も梅さへなどと叙して俗情に流れてゐる。勿論此の失望は失望に終るにあらで多少興ずる所もあるのであらうが、失望と言はずに寧ろ今少し打興じてもらひたかつた。

伊賀の或方にて

旅烏古巣は梅になりにけり

伊賀は芭蕉翁の故里である、其の故里へ歸つて親戚などの方で咏じた句と見える。

旅烏とは元と此地に居たのに久しく旅の空を飛でゐた烏の事で、歸つて見ると、以前は他の木があつてそれに巣をかけて居たのに、今は其木もなく皆な梅の木になつて花が盛んに咲いてゐるといふ意味である。表面は右の通りだが、裏面には芭蕉が久しく旅にあつて故里へ歸つて見るといろ〳〵趣が違つて居て、ある方に於ては代も變つてゐたりする、其滄桑の感に打たれのを斯く叙述したのである。餘り佳句とも言へないが、人事の述懷などには斯樣な比喩を取つて、それとなく打咏ずるのも一の手段じや。

訪山隱

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

前書は山の隱者を訪ねたといふ事。(或いは人名歟)昔し支那に林和靖といふ人があつて、非常に梅と鶴とを愛して、梅は自分の妻で鶴は自分の子であるとして歌つた事があるので、古來鶴と梅とはつき物になつてゐる。其の事を藉り來つて此句が出來たものと見える。即ち今ま玆處へ尋ね來ると梅は今を盛りに咲き匂うてゐる、併し鶴は居ぬ、昨日あたり鶴を盗まれでもしたのであらうかと打興じたのである。隱者に對し梅の咲けるを見て斯かる趣向を取つたのは時に取つて面白い。又た昨日や盗まれしと言つて疑問的に故事を用ひた所も厭味がなく、隱者も德高く風雅を樂める人たる事を想像されて、やゝ巧みな句だと思はれる。而かも其の巧みたるや弄巧といふ程の

痕跡も無いのである。

梅さいてよろこぶ鳥のけしきかな

梅がさいて鳥の其處此處に啼いてゐる景色を叙した句じや。鳥のなき居る景色がさも喜ばし氣に見えるといふ處から鳥もよろこぶと言つたので、これ等が詩人の情懷である。今日より見れば平凡の趣向のやうじやが當時では此位なものも興ありとして一度は咏じたものと見える。無雜作に叙し去つて別段に趣向を用ひぬ處は却つて厭味に陷らず、作者も鳥も共に喜んでゐる狀況さへも連想されるのである。

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ

或人の住居に玉簾が垂れてゐる、其傍に紅梅が咲いてゐるといふ景色を叙したのである。其の紅梅の咲いてゐるのを見て紅梅やと言ひ、

玉簾の奥には如何なる人が住める、定めし美しき人が居るであらうに、さても見まほし戀しい事じやと言つたのじや。紅梅は梅の内でも白梅よりかも女がかつて艶な感じを起すもので玉簾といへば幾らか身分ある人の住居らしい趣がある。其處で此の二つに對して見ぬ戀つくると述べたのじや。併し戀つくるといふも深く其内の人を戀ひ焦がれるといふのでなく唯だ其趣により時に取つての興をうたふたのみである。今日の文學では、戀愛と稱して男女の熱情を說くけれども、此時代の文學殊に俳句趣味は個樣な熱情などはなるべく避けて唯だ風雅に輕ろ〳〵と興じ歌つたものじや。此句も斯樣な場合又多少滑稽的に叙した所もある。一本には京都の御所内を通つた時の作としてあるが若しさうとしても此場合は帝王の居といふことは全く忘れて見ねばならぬのじや。

梅折つて椿にまよふ袂かな

梅が咲いてゐる椿も咲いてゐる、其の庭へ下りたちて先づ梅を手折つた、ふりむいて見ると椿も棄てがたき趣で咲いてゐる。梅よりは椿を折つた方がよかつたらうか、こちらか、あちらか、と打興じたので、袂かなとは梅を折る時に袂が椿に觸れたのでもあらう。又戀には人の袂を曳くといふこともある故袂といへば情もこもるやうになる。現實寫生的の作らしいが、少しく趣意の不分明な所がある。

○山里は萬歳おそし梅の花

山里の春の趣を叙したので、或いは芭蕉が山里へ來た時の咏でもあらうか。萬歳は年頭に來るもので誰れも知つてゐるもの、其の萬歳は都の方へ先づ行くから山里では萬歳の來るのがおそい、其の來た時は丁度梅が滿開であつた、即ち梅が咲いてゐる時に恰かも萬歳が

來たといふ實況を句にしたのであらう。若し又たこれを少しく穿鑿して解すると、梅の花も萬歳も共に山里ではおそいと解する事も出來る、併し此句の着想は前の解釋位の程度に止めたいものじや。

奈良にて

阿古久曾の心はしらず梅の花

阿古久曾とは紀貫之の幼名だと聞いてゐる。貫之の心は知らずにアノ梅の花は咲いてゐるといふので奈良に於て梅花を見て貫之の歌を思ひ起し、奈良の萬葉時代と古今時代と移りかはつた歌風の事など思ひ浮べて、奈良の梅の花は貫之の撰んだ古今の風調には關係なく、しらぬ顔で咲いてゐる、貫之の心でなく昔しの儘の心で咲いてゐるといふやうな意も裏面に含ませたのであらう。それを貫之と言はずに阿古久曾と言つたのは、何となく奈良即ち萬葉時代に對して調和

した字であるからであらう。こゝらは修辭上一つの心得である。又心は知らずとは例の人はいざの歌から來たのじや。

卓袋亭月待

月まちや梅かたけゆく小山伏

卓袋亭といふ場所で月待をしてゐた時に作つた句と見える。年若いのか又は小柄なのか或る山伏が梅をかたいで行きつゝある、折から自分は月待をしてゐるといふ唯だ其見た儘を詠じて、其の實況が自然に詩材となつたのじや。月待は二十六夜待の事で春でもする。

山家

手涕かむ音さへ梅のさかりかな

山村の趣を叙したので、山家の事であるから住む人も至つて質朴で涕をかむにも紙を用ひず指で鼻をたさへてかむだ、其處に梅が咲いてゐて恰も盛りであつたといふので、手涕をかむのは卑しい事じやのに却つてそれも山家の趣に調和したのみならず、梅さく爲めに涕かむ音さへ興があつたといふ意を斯樣に言つたのである。元祿の質朴な氣風とは言へ、餘りに淺薄な趣向であるし、音さへなど言ふ所も多少理窟的で取るに足らぬ句じや。

伊賀の山家にうにといふものあり、土庭より堀出して薪とす、石にもあらず木にもあらず、黑色にして惡しき香あり、そのかみ高梨野也。これを考て曰く、本草に石炭といふものあり、いかに申傳へて此國にのみ燒きならはしけんいとめづらし。

香に匂へうにほる岡の梅の花

前書は、伊賀の山家にうにといふ物がある、地の底から堀出して薪

にする、石でもなく木でもなく色の黑い惡い匂のあるものじや、それが出るのは其の昔し高梨野と言つた所じや。余がこれを考へて見るのに。本草といふ書中に石炭といふものがある、その炭といふ所から、燒くのでも無からうが、いかやうに申傳へて此國でばかりこれを燒くのであらうか極めて珍らしいといふ前書。うにを堀り出すので、此岡はくさい。匂ひのいゝ梅の花よ成る丈け匂へうにを堀り出す此岡の梅の花よ、といふ意。句中のうに堀るは場所の說明、それがうにのくさいといふ所より同じ鼻の關係から梅の花の事を言つて、梅の花に成丈け匂うて、うにの香を打消してしまへと興じたのである。

一とせ都の空に旅寢せしころ、道にて行脚の僧に知人になり侍るに、此春みちのたゝ見にゆくとて、我草庵を訪れければ

又もこへ藪の中なる梅の花

都の空とは他より都を望めば遠いから空といふのである。前書で見ると、或いは深川の草庵に居たのであらうかと思はれる。表面の言葉は又元へ春がたち返つて藪の中の梅が咲いたといふことだが、裏面には嘗ては九重の都でお出合ひ申た私が又元の草深い江戸の片邊りへ立戻り佗びしく暮らして居りますと滑稽を交へて謙遜を表したのぢや。

斯樣の場合は餘り慥かに比喩せずに、微かに意をほのめかす方が手段の高いので、今日とても斯かる場合には此心得をもつて作らねばならぬ。

伊勢にて

おこらこの一もとゆかし梅の花

おこら子とは伊勢大神宮に仕へ申して神事に與かるもので、神官の娘の年少にて尚ほ紅潮期に達せぬものを採用するので、極めて無邪氣にして神聖な乙女である。其のおこら子の詰めてゐる家があつて其傍に梅花が一株ある、それを見て感じた儘を咏じたので、即ち梅の花は洵にゆかしい、他の處にあるのよりかも此のお子ら子の家の邊りにある此一本が洵にゆかしいといふ意で、梅の純潔にして櫻花などの如く艶ならざる所が無邪氣にして世心の出來ず且神に仕へてゐる乙女によく調和してゐる點を見付けたのぢや。

網代民部か息に逢て

梅の木になほやどり木や梅の花

梅の幹に洞があつて土が埋まつてゐる、それにやどり木が出來てゐるそのやどり木も亦た梅で、梅の木に猶又た梅が咲いてゐるといふ意。而して。裏面には比喩を含むでゐることは前書を見ても察せられる。即ち梅の木に梅のやどり木は恰も人の父子の如く、民部も德あつて風雅の人、其子も亦た親の氣象を受繼いて、此親にして此子ありといふ所を暗にほのめかしたのぢや。又やどり木といつたのは此子息がまだ部屋住でゐるといふ意味もあらう。

里の子よ梅折殘せ牛の鞭

村里に梅の花が咲いてゐる、村童數人無暗と梅を折取つてゐる、左樣に折らずと置きたいと感じた儘を斯く咏じたので、村童の梅を折るのは其實何の爲めにするのかわからぬを、牛の鞭にするのぢやと思ひなして、里の子よ何とぞ其の梅の枝を少しは折り殘せよ、牛の鞭にずる其梅の枝をと咏じたのぢや。單に折るなと言はずに、折殘

せと言ひつた處など詩的感興を深からしめる所以で、流石は芭蕉翁だけあつて、修辭が老錬である

園女亭

暖簾のたくものゆかし北の梅

園女は芭蕉翁時代の女俳人。其の女の宅で咏じた句と見える。暖簾が垂れて居て傍らに梅が咲いてゐる、其の奥の方には如何なる人が住んでゐるのであらうか、何となく物ゆかしいといふのが表面の解。併し園女の宅で作つたのであるから、奥ものゆかしとは、園女の風雅に遊びて人並勝れてゐるその心の奥を床しく思ふといふ所を裏面にほのめかしてゐるらしい。北の梅とは何故に言つたのか分明しないが、庭が實際北面であつたのか、或いは男の陽に對する女の陰の意味か、何れにしても北と言つたのは矢張趣を添へてゐる。

乙州の東武行餞別

梅わか菜まりこの宿のこゝろ汁

乙州は芭蕉の弟子、東武とは東の武藏で江戸の事、芭蕉翁が上方に遊んで居た時の句と見える。

乙州が東海道五十三次を經てゆく道々の旅情を思ひやりて、お前が前途には春の旅の事であれば、定めし梅も咲いてゐるであらう、若菜もあるであらう、まりこの宿へいつては名物のこゝろ汁も喰ふことであらう、嘸ぞ面白く興じつゝ行かるゝであらう、さても羨ましい次第ぢやといふやうな意である、人を送る時は別れを悲しむのが普通であるが、此の如く興じてやるのも餞別の意に適つてゐる、面白い句として推すに躊躇せぬ。

且又た宗匠達は切字をやかましく言ふが、此句には一つも切字がな

い、而かもよく一句の意は盡きて文章は完結してゐる。

春もやゝけしきこゝふの月と梅

此句は言葉だけの意味で、今迄は月も梅も尙ほ寒げで何處となく春めかぬ所があつたが、昨今に至つて月も梅も時節相當に景色がとゝなつたといふのである。あまり佳句ではない。

かそへ來ぬ屋敷〳〵の梅柳

身分ある人の住める家居の續いてゐる屋敷町といふやうな所を通つた。眺め乍ら過ぎるのに、何處にも〳〵梅と柳があつて、段々數へ〳〵來たといふ意。春の外出した景色を何の工夫もなくよく言ひ現はしてゐる。

去來か許へ亡人の事など言ひつかはすとて

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

去來は芭蕉翁の門人、亡人とは死に失せた人。梅の花のさく頃に蒟蒻のさしみを喰ふのは何となくすごくすさまじい。世の人は浮立つ春であるのに亡き人の爲めに獨り引籠り日々の食事も只精進物などを喰つて居るのは誠にすごくすさまじいといふ意である。

何某新八去年の二月身まかりしを一周忌のほとに父梅丸子の方へ申つかはしける

梅か香にむかしの一字あはれなり

何某新八とは苗字を忘れたからであらう、梅丸は芭蕉翁の交際あつた人と見える。

梅が咲いて其香に對すると、昔といふ一字が特に哀はれに感ずるといふのが表面の意味、裏面には身まかりし人を梅によそへて梅の如き其人は散つてしまつた、今ま梅が香に對するとそゝろに昔の事が

偲ばるゝといふのぢや。昔の一字といつた處が作者の働きである。

梅か香にのつと日の出る山路かな

山路をのぼつてゆく、道ばたには梅が咲いて居て匂ひがする、向ふの山の上からは朝日が出た、其の趣がのつとしてゐた。それでのつと日の出る山路かなぢや。のつと出るとは頗る山路の日の出に適した形容でのつとゝ言つた爲めに全面が引立つて景色が目に浮ぶやうに思はれる。思ひ切つた言葉を使つたものである。炭俵集に野坡の脇附で大分やかましい句ぢやがそれはどうでもよい。

葉にそむく椿や花のよそこゝろ

一本の椿があつて、花は花で咲いてゐる、葉は葉で茂つてゐる、花と葉が何となく關係を持たずに、互ひに餘所々々しく即ち餘所心でゐるといふのを修辭上斯く花の方より言葉を立てたので、即ち葉

に背く椿の木よ其花は葉に對して全く餘所心でゐるといつたのである。實際椿には個樣な趣があるといへばあるやうぢや。

落さまに水こぼしゆく花椿

一本の椿がある、それを眺めてゐるうちに花が散つて地へ落ちた、其の落つる際に花にたまつて居た雨の露がこぼれた。それを花が散り落つる其落ちながら水をこぼしていつたと云ので、椿の花の落ちた。趣も面白く、又た靜かな春の日和の景色も連想される殊に落さまにといふ言葉が如何にもよく瞬間の趣を現はしてゐて、洵に力ある叙寫法である。

逃水や椿なかるゝ竹のたく

逃水とは野原などに於てあちらこちらと人に逃げるやうに流れてゐる水の事で、武藏野に專ら用ひられてゐる名ぢやが此句では只野原

の流れといふ位に見て好からう。其の逃水か竹藪の奥の方へ流れ込んでゐて、それに椿の花が落ちて共に流れつゝあるといふ趣ぢや印象明瞭、畫にでも書きたいやうな句である。

二月吉日とて是橘か剃髪して醫門に入を賀す

初午に狐のそりし天窓かな

二月の或る日を吉日ぢやといつて是橘といふ男が醫者になつた、昔の醫者は總髪のもあるが又た剃髪して坊主になるのもある。是橘は剃髪して醫者の門に入つたと見える。それを芭蕉翁か賀して此句を作つたのじや。

二月の初午の祭り即ち稲荷の祭のある月、稲荷は狐がつきもので、其の狐は人を化して坊主に剃るなどいふ事がよく傳へられてゐる、そこ等の事から此句の想を搆へて、是橘の坊主になつたのは全く狐

に剃られたのぢやとしてしまつて、滑稽的に斯く輕ろくいつたのである。何の搆ひもなく言ひ放つた所、頗る無邪氣で面白い。殊に余の如く滑稽を好む者には一層面白く感ぜられるのである。

伊勢にて

神垣や思ひもかけず涅はん像

伊勢國で神廟を拜した句と見える。神垣は即ち神廟をいつたので此有り難き大前に額づけば一心渇仰して何等の餘念もなく、佛法の事などは一切忘却してしまふ、といふのを季節の物に取つて釋迦の涅槃像を呼び出し、其涅槃像の事などは思ひもかけぬ、一切忘却してしまつてゐるといふのぢや。而して思ひもかけずは像幅をかけるといふに懸け詞にもなつてゐる。又金葉集に神垣のあたりと思へど夕たすき思ひもかけぬ鉦の音哉とある此歌からも來てゐるさうぢや。

貞享五年きさらきの末伊勢に訪づ、我御白洲の土を踏む事既に五たびに及び侍りぬ。ひとつ〳〵年の加はれるに從ひて、かけまくもかしこきおほん光りも、思ひまされる心地して、かの西行の涙のあとをしたひ、增賀のまことをかなしひて、內外の御前にぬかつき乍ら、袂しほる許りになん侍る

何の木の花ことはしらず匂ひ哉

前書の御白洲とは神前廣前に敷いてある白砂の事で法庭ではない。西行の涙の跡とは、彼の何事のおはしますかは知ねども難有さにぞ涙こぼるゝといふ歌の其の涙の跡といふ意、增賀の誠とは此法師が神廚に詣で名利を捨よとの示現を蒙り三衣を乞食に脫ぎ與へたといふ故事。

神前にぬかついた時の心持を理想的に、何の木の花であるか氣高いにほひがしたと叙したので、實際匂ふ木があつて其名を知らぬといふ意味ではない。西行の何事のおはしますと言つたのから、何事を實物にかへて何の木とした位な事であらう。斯かる敬神の場合には斯樣に理想的の事を實地らしく言ひなすもよい。花の木の何であるかは穿鑿するに及ばぬ。

裸には未だ衣更着のあらしかな

衣更着とは二月の事、春の衣を着かへる儀式が昔しはあつたのである。其の着替をする時に衣を脫いだら其の裸にはまだ嵐が寒く感ぜられたといふを寒いといふ語を略して斯樣に言ひなしたのである。裸にはと言つた所が此句の着眼點で、無雜作な處に多少の趣を帶びてゐる。尤も此句も矢張伊勢神廚の詠であるから暗に、增賀法師の

三衣を脱いだその場合を想ひ遣つたことゝなるのぢや。

嗒山旅宿

陽炎の我肩に立つ紙衣かな

陽炎とは春の日などに善く人の目に入る蒸發氣のゆら〳〵としてゐるものをいふ。作者の着てゐた紙衣が最初雨にでも濡れてゐたのであらう。それが旅宿へ着いた時追ひ〳〵乾いて來たので自分の紙衣即ち身體の上から陽炎が立つであらうと想像したのを實際に立つたと定めて斯く言つた。是れ即ち詩興で、此句を讀む吾々もどことなく左樣な事が目に上ぼるやうに感ぜらるゝ。殊に吾肩に立つとまで思ひ切つて言つてゐる所は矢張り芭蕉翁丈である。

陽炎や柴胡の糸の薄ぐもり

柴胡とは藥などにもする植物で其葉が糸のやうなものぢやさうな。

野の畑にかなんかに柴胡が植ゑてある、陽炎が其處に立つてゐる、折柄薄曇りの日であつたといふ實況を叙したに過ぎぬ。而して其陽炎が柴胡の糸のやうなといふのを直ちに糸と言ひなして、其の界隈の薄曇りであつたのを直ちに糸の薄曇りと言つたのである。これ亦た詩人の手品。

伊賀新大佛寺

丈六に陽炎高し石の上

一丈六尺の高さの佛像が石の上にある、其の佛像の周圍に陽炎が高く立つてゐるといふので、佛像に陽炎が立つなどは何となく調和が面白い。

枯芝や未だ湯炎の一二寸

春尚ほ淺く芝も未だ青々と萠ないで冬ごしの枯れた儘でゐる、其

の枯芝の上へ陽炎も盛んには立昇らず、未だヤット一二寸許りチョロ〳〵と低く立ちゆらいでゐるといふので、春の尙ほ淺いといふ周圍の趣まで連想される、芭蕉翁の句としては先づ纖巧な方と言つてよからう。

野州室の八島にて

糸遊に結びつきたる煙かな

下野の室の八島といふ名所で作つたのだ。

糸遊は陽炎の別名と見てよい。糸遊が燃え立つてゐる、其傍で何か燒いたと見え煙が立ち昇つて陽炎の中へ混合してゐる、といふやうな景色を煙か陽炎に結びついたと叙したのである。高く立つ方を糸遊といふ說もあつて此場合は其高いのらしい。周圍の判然せぬのは此句の缺點。

入かゝる日も糸遊の名殘かな

日は早や西嶺に傾いて一日の名殘である。日が入れば糸遊も消えてしまふから日の入るのと共に又た糸遊の名殘でもある。それを斯く日と糸遊とが名殘を措み合ふ樣に叙したのでどことなく餘情のある句ぢや。

百景や杉の木間に色見草

百景を數へるほどの名所であるから、どちらを見ても好景ならざるはなしぢや。殊に杉の木の間にも色見草即ち櫻が咲いてゐるなど頗る面白い、ア、好い景色ぢや此の百景はといふ意である。果して百景と定まつに名所があつたのか、但しは山水のあまたのよい景色を見て假りに百景と稱したのかその處はわからぬ。櫻の別名を用ひたのは此場合に景色を助けてゐる。

木曾の情雪や生ぬく春の草

木曾路を旅してゐると、折ふし春になりかゝつて、雪の下の草が暖氣によつて雪の上へ生えぬけて芽を出して來たといふ意である。而して其の客觀の景色を一層強く現す爲めに木曾の情と言つて木曾の天地に情あるかの如く歌つたのである。又た雪を生ぬくと言ふ可きを雪やと言つたのは疑ひとするよりは寧ろ力を添ふる爲めの言葉で、又生えぬくといつたのも力強く萠出る處がよく現れてゐる。別段に佳句とも思はぬが、芭蕉翁が叙寫法に變化のある處も見えるし、上五文字を木曾の情と慥かに据えた處も句法の上に力がある。

雪間より薄紫の芽獨活かな

これ亦た山中の趣を叙したのであらう。次第に春の季節になつて雪の間から薄紫色をしてゐる獨活の芽か出たといふ意で、薄紫のと言つた爲めに何となく芽獨活の生出るのを目に見るやうで、又可憐な情も含み甚だ感じのよい句ぢや。

二月堂

水取や氷の僧の沓の音

二月堂とは奈良の東大寺内にある堂の名で、此處では昔しから水取の儀式といふがあつて、季の題とまでなつてゐる。

水取の式は夜中から明方にかゝつて行ふのぢや。寒い二月の頃であるから、其の儀式の爲め僧が堂へ來るのには是非氷の上を踏んでくる、從つて氷に沓の音がひゞくといふ實況を叙した句で、通常ならば氷にといふ可きを氷のとしたのは、修辭上又音調上の部合である。

泊瀬にて

春の夜や籠人ゆかし堂の隅

大和國の泊瀬寺で、こゝは觀音を祭つて有名な所で、昔しから此處の堂へは夜籠などする習慣があつた。これも夜籠をする所を咏じたのぢや。折柄春の夜であつて、堂は廣く隅は暗い、其の隅の暗い處に人のけはひがする、其人は果して如何樣な人であらうか、女性であらうか、美しい人でもあらうか、或ひは又た如何樣な身分の人であらうかなどと思ふのをゆかしいといつたので、源氏玉蔓の故事もあり、多少は戀味も含んで居て、春夜の趣がよく現れてゐる。但し籠人ゆかしと言つて又た堂の隅と說明した所などは、少し言葉が圓滑でない氣持もする殊に

春の夜は誰れか初瀨の堂こもり　曾良

といふ句が猿蓑集にのつてゐる。此句と芭蕉翁の句とは殆ど着想も同樣である、何れが先きに作つた句かは知らぬが、とにかく餘り上

乘の作とは言へない。

春風やきせるくはへて船頭殿

川の渡場で見た景色でもあらうか、此風が吹いてゐる、舟べりには船頭が咬へ煙管で安閑としてゐる、といふので、春の日の渡頭の長閑な所がよく現はれてゐる。又た船頭殿と言つたのも殿の字を加へた爲めに多少船頭に戲れた氣味もあつて滑稽を含み一層興を添へてゐる。且つ此の言葉の爲めに咬へ煙管も船頭も卑しく感ぜず、全く美化されてしまつたのは手柄と言ふ可きぢや

春風や人聲うつる三笠山

三笠山は奈良で春日山の北に低く連つてゐる草の生えた山である。春風やと言つてゐるから、是非うらゝかに春の温き風が吹いてゐるので、其時は定めし三笠山は草が青々と萠えてゐたのであらう、其

の青草の上を人があちこちとして打ち語つてゐる、其聲が山に映りさうだといふのを直ちに映るといつたのである。春風のけしきとしては面白いやうに思ふ。唯だ人聲映るが少し巧みを弄し過ぎてゐるかにも思はれる。

笠寺奉納

笠寺やもらぬ窟も春の雨

笠寺は尾張國である。昔し本堂が頽破に及んで本尊が大雨の中に濡れてゐられたのを或る長者の娘が見かねて自分の笠をさしかけてゐたといふ故事のある寺、其寺へ奉納したといふ前書。

右の故事から着想して、今の笠寺は堂も立派に出來てゐて、雨漏などの憂ひはないながらも春雨がふれば何となく物なつかしい心地がするといつたので、春雨より昔の女のやさしい心ばへなどを思ひ浮べたのであらう。窟とは佛ぢやからいふのか實際岩屋があるのか調べてゐぬ。或る解に金葉集のもらぬ窟も袖はぬれけりといふが引いてある。參考。

吉野西行庵二句

以下の二句は吉野の西行庵で作つたといふ事。

凍解けて筆に汲ほす清水かな

今迄は冬で氷がはりつめて居たが、春になつて其の氷が解けたので清水になつた、其清水を筆で汲干すはかりに筆をむしやうに使つたと言ふのが正面の解。裏面には西行の文事にあつき事を思ひやりて、西行は斯く迄筆を使つたであらうと往事を追懷したのであらう。表面には自分の事とも西行の事とも明言せずに斯樣に叙するのも亦た一の法である。又此句には自分が西行の流れを汲んで一枝の筆を頻

りとつかつてゐる、といふ心持も帶びてゐるかとも思はれる。

春雨の木下につこふ雫かな

木立でもあつて、折ふしそこに春雨が降つてゐる、其の雨が木をぬらし枝をつたうて雫となつて下に落つるといふ趣を叙したのぢや。此の句も表面はそれだけぢやが、裏面には前書のある爲め自然木下の雫に西行を慕ひ、自分が其餘澤の文事に從事しゐる情懷を叙してゐると見るのぢや。

以上の二句は或いは西行の歌などによつたものかもしれぬが余はまだそれを調べてゐぬ。山家集參考。

春雨や蓬を伸す草のみち

春雨が降つてゐる、道傍には草が青々と萠え出てゐる、中にもとりわき蓬が段〳〵と伸び出てゐるといふ景で、それを春雨が蓬を伸したのぢやと言ひなしたのである。草の道と下へ置いた爲めに、蓬の伸んで、春雨の降つてゐる以外の景色が一層趣を助けるのである。

赤阪庵にて

不性さやかき起されし春の雨

赤阪庵へ行つて夜更けまで句作したり酒を飲んだりして其夜は其處へ一泊したのであらう。そこで翌朝は物うく不性になつてしまい長寢してゐるのを人にかき起された、折りしも春雨がふつてゐたといふ意で、物うく引立たぬ樣が何となく春雨に適してゐるし、殊に上五字に不性さやと無頓着に置いた所も面白い。

春雨や簑ふきかへす川柳

川柳がある、春雨が降つてゐる、風も添うてゐる、そこに人が簑を着て立つか歩くかしてゐる、其簑を風が吹きかへす、又川柳も其簑

と同じく風に吹かれてゐるといふ意ぢや。それを川柳が簑を吹きかへすかのやうに叙した處が一層景を添へる爲めの手段である。

春雨や蜂の巣傳ふ屋根の漏

春雨が降る、侘びたる住居で屋根漏がする、其の漏水が軒裏の蜂の巣を傳つてゐるといふ客觀の景色である。如何にも侘しい景色の内にも蜂の巣にはる多少陽氣な處も含んでゐるので、矢張春雨の趣が搆成されてゐる。

在原寺にて

うくひすを魂に眠るか嬌柳

在平寺は業平に關係の寺であらう。業平は昔しいろ〳〵戀に浮身をやつして艶名の今に傳へられてゐる人、其處でその寺の柳も矢張多情で、啼く鶯を己れが魂として眠ることもあるであらう、此の嬌び

た柳よと、柳を擬人的に揶揄して裏面には業平に對する作者の理想を歌つたのである。併し餘りに巧を弄し過ぎた痕跡があり又た理想を叙するに斷定せずに眠るかと疑問法にした所などは多少厭味にも落ちてゐる。此句などが或派の不自然な巧を弄し、又た理想をかの宇によつて疑問法に叙する俑を作つたのではあるまいか。と言つてかの字は一切使用されぬといふのではない、多くの場合は疑問法にしない方がよいと言ふのである。又嬌柳とはその寺の柳の固有の名でもあるか。尙ほ調べたい。

猿雖に對して

もろ〳〵の心柳にまかす可し

對とは答へるの意で、猿雖が何か敎を乞うたのに答へたのである。(再、按下にも對の字があつて唯人と出逢つたことにしてゐるからこ

こも矢張それか）凡そ人といふものは樣々な妄念を起すものであるが、自分で自分といふ心を持たずに、唯だ境遇其儘に任かせて別に色々と細工らしい考を抱かぬがよい、恰も柳の風に從ふ如くせよといふ所から心を柳に委かせてしまへと言つたので、全く敎訓的の句で、詩としては取るに足らぬ。併し流石に芭蕉翁だけあつて、斯かる敎訓的の事を述べるにも風雅を忘れず、柳の如くせよと言はずして、柳に委かせよ、と言ひ柳の風に吹かれる客觀的の景色を持出したので幾らか詩的にもなつてはゐるのは感心ぢや。

古川にこびて芽をはる柳かな

川の流れに冬の趣が未た充分に取れ盡さぬ處から古川と言つたのであらう。其の川端に川柳がアチコチと小さい芽をは出してゐる。一本の柳でなく數あるやうぢや。其の芽を出してゐるのが何處やら見

てくれがしに人に嬌るかの樣にも見えるので、擬人的にして幾らか情を含ませた。其の嬌びてゐる場所は即ち古川で未だ荒凉としてゐる、其間に又多情なものがあると言つて、反對の配合を取つたぢや。多少趣味を感ずる句であるが特に嬌てといつた所が或いは巧に過ぎてゐるかとも思ふ。

吹たびに蝶の居直る柳かな

蝶は柳に止まつてゐる、會々風が吹く、蝶は驚いて飛上る、風やむ、蝶とまる、風吹く、蝶飛ぶといふ處を見て咏じたのぢや、全體が少し氣の利き過ぎてゐる處があるし、居直るなどいふも厭味な言葉ぢや。是等も後世或派に弊を與へたものだらうと思ふ。

贈杜國

笠の緒に柳わかねる旅出かな

芭蕉翁自身が他へ旅立つ時に杜國に示したものであらう。自分は旅立ちをする、折から春で柳が青く伸んでゐる、其の嫋々たる枝を旅出に携ふる檜笠の紐の代りにわかねて行くといふ意。實際は柳の枝を笠の緒にする筈はないが、折ふし春ではあつたし、柳を見たので、一寸戯れて云つたのに過ぎぬ、且又支那の故事として旅立の人を送る時に柳枝をわがねるといふ事もあるから、その故事などを取あはせて巧みに言つたものであらう。氣輕な趣が勝つから過巧の感はない。

腫ものにさはる柳のしなへかな

これは柳のよな〳〵と風に動く趣を形容して、腫物に障るといたいから輕く障る、柳のしなへ方がそれに似て居るといふのぢや。厭味を含んだ形容で、去來抄などにも此句を論じてゐる事があつたやうだが、余は芭蕉翁の句中最も俗な句ぢやと思ふ。

からかさに押わけ見たる柳かな

これも柳のゆら〳〵としてゐる樣を叙したので、折ふし雨が降つて傘をさしてゐた、所が春雨の中に柳のたれてゐるのが如何にも美しいので、傘をさした儘柳の中へ押わけて這入つて見たといふので、如何にもよく柳の風情が現はれてゐる、他より見たら畫にも書ける景ぢや。此句も巧を弄した所はあるが、かく迄實地に適切なる事を言ふと巧み乍らも感興が主となり、隨つて厭味を免れることが出來る。初心者の心得て置く可き所ぢや。

春の雨いと靜かに降つて、やがて晴れたる頃、近きあたりなる柳見に行きけるに、春光きよらかなる中に、滴り未だをやみなければ

八九間空で雨ふる柳かな

前書の意は、既に春雨がやんで柳を見に行つた、空は晴れて春の日の光りは清らかであるのに未だ柳の下には滴りがして居たからといふのぢや。

柳の梢から雫が頻に降る、その梢の高さを八九間もの高さと誇張し、柳の雫を其の八九間の空から降る雨ぢやと看做して個樣に打ち興じたものである。八九間と言つた所は多少奇拔なやうでもあるが、柳のやうなやさしい木の事を個樣に誇大にして說いたのは餘り感じが好くない。

蝙蝠も出てよ浮世の花に鳥

春も末になつたがまだ花も咲き鳥も啼いてゐる。それを春光も久しくなつて飽き果てゝ少しは鼻につくやうになつた、モー此のいとはしい浮世の花鳥の時は早く過ぎ去つて、蝙蝠が出る夏の初めの涼しい時に成つたらよからう、といふ情を叙したので、感興とはいふものゝ少し理窟臭い處が見えてよい句ではない。

世にさかる花にも念佛申しけり

世にさかるとは盛榮の意であらう。時を得顏に美しく咲き滿ちて居る櫻の花であるが佗人はそれに對しても念佛を申してゐるといふのぢや。尤も花に向つて回向するの何のといふ程の深い意味でもなく、唯だ世を捨てた身には別に藝能などもないから美しい物に感じた場合にも矢張南無阿彌陀佛〳〵の外は知らぬといふ、多少滑稽の心持もある。或いはさかるを迂の字ぢやとし、己れは世に迂遠ぢや。それで花にも念佛申して人並でない所業をする、と言つたやうにも見えるが、さかるで句切をつけること芭蕉翁の口氣としては不似合ぢ

やから先づ斯の如く解して置く。

蝶鳥もうはつき立つや花の雲

花といへば皆な櫻の事である。櫻花が雲の如くに咲いた時は蝶鳥も落付き心なくうはつき立つゝといふのが正面の意味、裏面には人も浮かれ立つよ、といふ事を含んでゐる。うはつき立つやと歌つた所は多少感興を振作させる點ぢや。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

八重櫻は奈良の名木、寺も七堂の建築式によつた大寺がある、七重とは佛界の莊嚴を誇張して七重何々と佛經に說いてゐる所から七重と口調上形容的に使つたものであらう。即ち奈良は七重の七堂迦藍もあり八重の櫻もあるといふのぢや。莊重且つ華麗な句であつて、一字の動詞やテニヲハもなく、總てを體言で持切つてゐる。是れも

芭蕉翁が創めた一體ともいふ可く、文學上意を留む可き所である。

訪山隱

橿の木の花にかまはぬ姿かな

そこに橿の木があつて、周邊には櫻が咲いてゐる、其の橿は美しき櫻花に少しのかけかまひもなくひとり常磐の綠を守つて立つてゐる、其れを卓然たる姿哉と言つたので、表面は單に客觀の句であるが、裏面には隱者の世と相遠かつて高節を守つてゐる事を賞贊したのであらう。

湖水眺望

からさきの松は花より朧にて

近江の湖水の眺望のけしきぢや。

春の夜のことなれば夜のかすみが辛崎の松にかゝつて、名所の一ッ

松が朧にかすんで見える。それが花よりかも朧なやうに見られた、言換へると花の朧なのよりかも又一種かはつた趣の朧さであると言つたのである。此句は昔しから「にて」止りで破格の文法としてやかましく論ぜられて居るやうぢやが、切字はなくとも意はよく切れてゐる。且つ句尾をにてと止めて尙ほあとに文字のあることをほのめかした爲め、却つて餘韻を加へてゐるのじや。さりとて餘り佳句ではない。

逢古人

命ふたつの中に活たる櫻かな

古人には逢へぬわけぢや。舊き友人の事なら、故人の誤りであらう、即ち故舊に逢つたといふ意味である。

人の命が二つある、其中へ櫻の花を活けたといふのが文章正面の解釋。併しそれでは何の事かわからぬから今一ッ推して見るに、己れと故人と二人乍ら幸ひにながらへてゐて久しぶりに再會の出來たのがうれしい、而かも時は春の花さく頃で一層うれしい、といふ心持を含んでゐる。即ち互に生きながらへたといふ處を抽象的概念で命二つと言て、更らにうれしい情を其時に活けてあつた現實の櫻を藉つて述べたのぢや。實に奇拔な着想である。斯樣な場合に事實になづんだ言葉や着想を用ふると兎角厭味に流れ理窟に陷るのであるが、斯く迄意表な叙寫は芭蕉翁にして始めて能くする所で、此老人が手段百端なのはいつもながら感心せざるを得ぬ。さりとて餘り佳句と推すほどでもないが、其の奇想には驚かされた。

山さくら瓦ふくもの先つ二つ

此句は少し分り兼ねるが、余が記憶に依ると或る處に二人の行ひす

ましてゐる僧があつて、いづれも草など折りかけて庵となして住んでゐた、即ち麁末な庵が二つあつた、といふ傳記がある。それを芭蕉翁の門人杜國は

足跡に櫻をまぐる庵二つ

と詠み、右の草折かけたのを櫻の枝であるとして與じてゐる。此芭蕉翁の句も蓋し右の傳記を飜案したので、草など折りかけ或は櫻の枝を曲げた庵二つでなく、こゝには瓦を葺いた庵が二つあつたといふのであらう。即ち山櫻のことであれば侘びたものと思ひの外、却つて立派な家があつたわいと興じたので、實際は寺院か或いは大百姓の宅でも見付けたのを態と戯れていつたのであらう。併し十分には分からぬ。

附記、木下長嘯子山家の記に瓦葺けるもの二つとある由。

參考。

毘沙門堂の花盛、四天王の榮花も、これにはいかでまさるべき、うへなる黑谷下河原、むかし遍照僧正の浮世をいとひし花頂山、わしのみやまの花の色、枯れにし鶴の林まで、思ひしられてあはれなり。

觀音の甍見やりつ花の雲

前書は謠曲西行櫻の文句を借り來つてゐる。其毘沙門堂とは昔し京都東福寺の傍にあつた堂、そこの花盛りは毘沙門、曠目、持國、增長の四天王が天上にて享受せる榮花もこゝの花盛りの樣にはとても勝りはすまい、こゝばかりでなく、上方に在る黑谷から下河原、昔し遍照僧正の浮世をいとうた花頂山の智恩院、又鷲のみやま即ち靈山の花の色、未だ枯れてゐる雙林寺の鶴の林あたりも、嘸ぞよい景

色であらう、其のよいけしきが思ひしられてあはれになつかしいやうな氣持がするといふ意で、何れも京都東山の名所だが今ま吾が身も其下に立ちて花盛りを見るにつけ、右東山全體が目に浮び、何れの春景もあはれに感ずると言つたのである。

句の意味は清水の觀音堂が甍を高う聳やかして居るのを打ち見やつた、其甍は漠々たる花の雲に包まれてゐて如何にも美しい景色である、といふことに過ぎぬ。

花さいて七日鶴見るふもとかな

花は七日間咲いてゐるものとは古來から定められてゐる。又鶴も一度下ると七日間は一ッ所にゐるものぢやさうな。それを取合はしていつたので、山には花が咲く、麓には鶴が見える、それが七日も續いて好い眺めぢやと歌つたのである。

物皆自得

花にあそふ虻なくらひそ友雀

花には虻が飛んでゐる、雀も遊んでゐる、同じく花に來つて共に樂んでゐるのであるから、此場合には虻を喰ふ事をすなよ雀ども、といふ意で、友雀とは友愛の情も含んでゐる。表面は右の如く虫と鳥との花に遊ぶ所を現はしてゐるが、裏面には前書のある爲めに世の中の人は各〻皆な自得してゐて爭ひ戰ふべき者でないと、いふやうな心持を現はしてゐるのぢや。理性に渡つてゐるから詩としては價値の乏しい筈ぢやが、虻や雀に就いていつたのみならず、言葉が如何にも無邪氣に出てゐるから自然感興もあつてまんざらでない心持がする。

鶴の巣も見らるゝ花の葉こしかな

櫻のさいてゐる與に他の木でもあつて、それに巣をつくつてゐるの

か、又た櫻の木のある部分に巣くつてゐるのか、何れにしろ花の中又は其れに近く、鶴の巣が見えて櫻の葉ごしとなつてゐる、その櫻を賞する處から其鶴の巣もたゞならず人目を引くことぢやといふので、別段に面白き句でもないと思ふ。此集の末に馬をさへ眺むる雪の旦哉といふ句もあるが、さへといはなかつた丈此句が好いのぢや。

草庵

花の雲鐘は上野か淺草か

草庵に居て障子をあけ放して見ると一面に花の雲である、又こゝばかりでなく上野向島あたりから江戸中は到處花の雲でみち〳〵てゐるとの主觀も交へ、其の花の雲の中で鐘が鳴つた、アノ鐘は上野であらうか但しは淺草であらうかと思ひやつたので、何となく春の日に人心の長閑に且つぼんやりしてゐる所と霞や花の雲の茫漠として

ゐる所とが同化してゐるやうぢや。此の句は古來人口に膾炙してゐる句であるが、膾炙してゐるだけそれだけ俗情を帶びて言葉の言方なども氣品が高尚でない。

あすは檜木とかや谷の老木のいへることあり、きのふは夢とすぎて、翌は未だ來らず、只生前一樽のたのしひの外に、あすは〳〵と言ひくらして終に賢者のそしりをうけぬ。

さひしさや花のあたりのあすならう

あすは檜木に成らう〳〵と毎日言つて居ならが何時迄も檜木になれと傳へられてゐるあすならうといふ木がある、それに例を取つて、生前の樂みを一樽の酒で滿足せずに、あすは何をする蛟をすると言ひ言ひ日をくらしまつて賢者よりの譏を受けました。といふのが前書の意味である。

さびしい事ぢや花のあたりにあすならうの木が立つてゐるわい。花は美しく人にも見られて繁華であるのに、あすならうは淋しげに立つてゐる。といふので花の盛んなのに比して、あすならうをつまらぬものぢやと言ひ、暗に自己の佗び生涯を謙遜して言つたのぢや。斯樣に謙遜し卑下して自分は淋しい殘念なと言ひ乍ら、其實は裏面に自らなぐさめ自ら得意でゐる處が見える。尙一歩進めていふと人は皆な醉ひ、我れ獨り醒めたり、人は皆齷齪たり、我れ獨り安逸せり、といふやうに自分を重んじた氣味もある。それを反對にいふのが詩人叙懷の方法で、句としては價はないが、一の叙懷方法たる事を注意して置けばよからう。

伊賀の上野藥師寺初會

はつ櫻折しもけふはよき日なり

初櫻とは初めて咲いた櫻、それで櫻も初めてさく、折ふし天氣もよい日だ、實に心持のよい事ぢやといふ意で、表面は右のとほり客觀を叙してゐるが、裏面には此の初會が誠にたのしいといふ意も含んでゐる。又た初會ゆへに初櫻といつたやうにも見えるが、それ等は餘り深く考へぬ方がよからう。

咲みたす桃の中より初櫻

桃と櫻の咲いてゐる光景を其儘に叙した句である。桃は櫻よりも少し早く咲くもので、桃が既に咲みだして十二分である中に櫻の初咲きが見え出したといふのぢや。尤も咲き滿たす桃の中といふと、一ツの庭に桃の木が澤山ある中に櫻があるといつたとも見え、又た世間全體に周圍を廣く眺めて、桃の滿開の時に櫻が咲きかゝると言つたとも見える。隨て此句は場所の關係が不明丁ぢや。今少し明かに

叙したら善かつたらう。

景清も花見の座には七兵衞

花見のやうな優美な坐には武士のやうなものでも何となく和らいで見ゆると戯れた句ぢや。景清とは平家の士で惡七兵衞と言つた人、即ち七男で兵衞の官であつたから七兵衞、餘り強い荒武者であつたから惡の字をつけて呼ばれたのである。斯樣な強い荒武者の景清も。花見の座では惡七兵衞の惡の字を除けて單だ七兵衞となつてゐるであらう、即ち七兵衞となりすましてゐる、といふ意味で、二本指(さし)の物堅い武士も花見の時には浮かれ〳〵て和か〳〵だけてゐるだらうと言つたのである。それを直ちに武士と言はずして昔しの歴史上の人物を藉り來つて斯樣に婉曲に現はした所が詩的興味を生ぜしむる所以である。格段によい句とも思はぬが斯樣な手段も初學者は知つて置く可きである。

探丸子の別墅

さま〳〵の事思ひ出す櫻かな

芭蕉翁は伊賀國の人であつたが、自分が幼年から仕へてゐた藤堂蟬吟といふ方が物故したので哀悼悲嘆の餘り遁世をして京都や江戸の間を彷徨して居た。貞享五年の春に故郷の伊賀へ歸つた時に、蟬吟の子息の探丸子が芭蕉翁の來遊したのを喜んで別墅へ招いて會見した、其招きに應じて行つた芭蕉翁は萬感胸に滿ちて此句を作つたのである。折しも春は三月で櫻の咲く頃であつたから昔ながらの櫻花が園中に咲いてゐるのを見てさま〳〵と往事を心に思ひ出で其感懷を其儘に吐露したので、即ちさま〳〵の事を思ひ出すのは此櫻の花ぢやといつたのである。此句は作者に一點の工夫もなく、其感懷と櫻

とが果して如何なる關係があるか又詩として配合が好いか惡いかなどといふことは少しも問はなかつたのであらう。否問ふ餘裕もなかつたのであらう。隨て着想があまりに單純にして少しく平凡である、から前書なしの句としては大なる價を認められぬが、前書があつてかゝる場合の句としては景情共に叙寫されてゐて先づ佳句の方へ入れてもよからう。凡て斯樣な場合の句は、寧ろ巧を弄せず思を構へず有の儘を眞率に言ふのが其體を得てゐるので、斯樣な場合の句作の例として初學者は心得て置く可きものぢや。

飄竹庵に膝をいれて旅の思ひいと安かりければ

花を宿にはしめ終りや廿日ほど

前書は古文を用ひ來つて膝を容るゝの安きといふ事から膝を容れて旅の思ひが安いと言つたのぢや。即ち氣樂に御前の處で宿つてゐる

といふに過ぎぬ。

句の意味は平忠度の歌などもあるので、折ふし花の咲く頃であつたから花を宿にして、初めから終りまで二十日程も泊つたと言つたのである。さうして裏面には庵主を花にたぐへて心面白く長くと逗留したと言つて主人が侍遇の厚かつたのを謝する意も含めたのである。

同亭より旅立ちけるに

此ほどを花に禮いふわかれかな

前の句と續いた言葉であつて、此程は長く花に宿つたが今は立去るから其の花に禮をいふ其の別かれであるといふ意で、禮いふわかれと續くのでなく、別れるときに禮をいふと言ふ心持である。此句も亦た裏面には主人に對しての謝意を含んでゐることは勿論。

笠の裏に書きつけ、る

芳野にて櫻見せうそひの木笠

芳野行脚の時に、笠の裏へ書きつけた句ぢや。自分は是から吉野へ花見に行くのぢや、お前にも芳野て櫻を見せてやらうぞや檜木笠よと、檜木笠を擬人的にして戯れ興じた句である。多少滑稽の趣味をも持つてゐる。

龍門二句

芳野の名所龍門の瀧で左の二句を讀んだといふ前書。

龍門の花や上戸の土産にせん

龍門の瀧の盛んに滔々として落ちて來る勢が如何にも心持のよい所から、斯樣な處の花は嘸ぞ上戸の襟懷に適合するであらうと思ひ遣つて、一枝折取つて上戸の土産に致さうと打興じたのである。或いは

龍門といふは酒の名にもあつたかも知れぬがそんな事は考へずに、突然斯樣な興を起したものとして見る方が面白い。

酒のみに語らんかゝる瀧の花

前句と同じ意を言替へたので、斯樣な瀧の花の景色を酒のみに語つて聞かせよう、ドンナに面白がるだらうと興じたのである。

櫻がり奇特や日々に五里六里

芳野行脚中の句である。櫻をあちこちと見てあるく人が今日は五里明日は六里といふ風に毎日歩行して行く、それを勞ともせずに居るが誠に奇特な事で感心ぢやといふ意で、表面は他人の櫻狩の樣を打見たばかりのやうであるが實は自分も其内に含まれてゐるので、多少揶揄的又滑稽的に言ひなして且つ自己の興情を現はしたのぢや。

芳野

花盛山は日頃の朝ぼらけ

日頃とは兼て待ちゐたる日合ひ即ちよき日頃といふ位の意味であらう。そこで此句は今が花の盛りである、その山は花によく適應した兼て待てゐた日頃の朝ぼらけである、といつたので、山の朝ぼらけの景色のうるはしいのが誠に滿開の花に適應してゐる處を見た儘に叙したのである。

しばらくは花の上なる月夜かな

前のは櫻の朝景色、これは櫻の夜景を叙したので、前後の夜も月夜であるがこの暫の間は月夜が花の上に於てある、即ち櫻が月夜を占得してゐると言つたのぢや。如何にも其界隈の櫻に充たされてゐる景色までが目に浮ぶやうぢや。花の上なる月夜と言ふ所が作者の趣向で、充分に誇張した所は流石の技倆である。但しばらくはと言つた所は多少理性的の嫌ひもあるが、それも誇張と思へば耳障りにもならぬ。蓋し小細工な句には少しなりとも理性的の語を使ふと失策する基となるが、大きな句には左樣な患が少ないのである。

草尾村にて

花のかけ謠に似たる旅寐かな

草尾村といふ處で宿を取つて居ての句であらう、其時に花が咲いてゐた、其處で、自分か其の花のかけに宿つて旅寢をしてゐる趣は宛から謠にもありさうな趣である、彼の畫中の人といふ如く自分は今ま謠中の人になつてゐると打興じたのである。或いは何々の謠に當ると穿鑿する人もあるだらうが、左樣に何れの謠の趣と決めてしまうよりかも、唯だ漠然と謠にもありさうなと言つたとする方が趣が深い。佳句。

大和の國を行脚して葛城の麓を過るに、よその花は盛りにて、峰々はかすみわたりたる曙のけしき、いとゞ艶なるに、

かの神のみかたち惡しと人の口さがなく言傳へ侍れば

猶見たし花にあけゆく神の貌

大和の國を行脚して葛城山の下を通つたのに、外々の花は盛りで其あたりの峰々は皆な霞みわたつてゐる曙のけしきが極めて艶麗であるのに、かの葛城山の神樣の御形ちは頗る見ぐるしいと人の口惡く言ひ傳へたから此句を作るといふのが前書の大意ぢや。

平常の御貌も見たいが、花のさいて美しい曙の時はさなきだに醜い御貌は此景色に對しては如何に醜いであらうか、こんな時には尙更お顔が見たいものぢや、といふ意味で、滑稽的に言つたのである。元來滑稽の句は餘り巧みに言ふと往々失敗に歸する。成可く武骨に無邪氣に叙する方がよい、此句も猶見たしと無邪氣な無頓着な心持を其儘に打出したので面白く感ぜられる。

支考の東行餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具

支考は芭蕉の門人で餘程傲慢な横着者であつたとの事。それが東行は江戸へ行く事、其の時の餞別。

五器とは椀で五通り揃つてゐるもの、今でも禪宗の雲水僧は必ず携へてゐるさうな。實に簡短な器で五つて椀が一つに纏まるやうに出來て居て、如何にも質素にして佗しい器。それで花のやうな華かな物に對しても五器一具の質素に安んずるといふ此の心を推し量つて忘れることをすなよといふので、芭蕉翁自からは平生此の質素を守つて風雅に佗びてゐるから此心を推し量つてくれといふのぢや。即

ち支考は芭蕉歿後に數多の書を著はし種々大言を吐き一世の人を驚かして名を賣る事をつとめた男であるから此時から既に虚飾に流れて居たので、斯樣な句を與へて戒めたものと見てよからう。かくいふと全く敎訓的になるが、而かもそれを誠に手輕く花と五器とによりて言つたのは流石に詩的趣味を失はぬ。併し佳句でない事は勿論ぢや。

尾張の門人より淡酒一樽木曾の獨活茶一種おくりけるを人人にすゝむるとて

○飲あけて花いけにせん二舛樽

尾張の門人から淡酒即ち濁らぬよい酒と木曾に出來た獨活と茶を一種と贈つて來た、それを集まつてゐる人々にすゝめるとて此句を讀んだといふ前書。

句の意は此のよい酒を相互に飲んで飲んで飲み盡して、若し樽が空となつたらそれを花活にするが善からう此の二升樽を、といふので、飲みあけた空樽を花活にせうなどゝは一寸面白い趣向ぢや。芭蕉翁の門人共が大勢集まつて互ひに酒のみ興じて睦くしてゐる所が目に見えるし、又た一杯機嫌の芭蕉翁の顏も生々として見られるやうで、一たび此句を誦すると余も亦た此の座中に居るかと感ずるやうぢや。

春の夜は櫻にあけてしまひけり

春の夜櫻を見ながらとうゝ曉まで興じて遊んだ、即ち春の夜は全く櫻の花であけて仕舞つた、と言つたので、何の巧みもなく有つた儘を言つたのが此句の理窟臭くならぬ點である。且つ櫻花はそこに見えつゝあり旭などもさしてゐる景ぢや。

草庵に桃櫻あり門人に其角嵐雪あり

兩の手に桃と櫻や草の餅

自分の庵の庭には桃もあり櫻もある、門人には其角といふ才子や嵐雪といふ巧者もある、どうだい豪いものだらうと頗る自得の意を滑稽的に言つてゐるのが前書の意。

兩手には桃と櫻とがある、其の上に口には草の餅を喰つてゐる。よい事ばかりで實に面白いうれしいと言つたので、其の裏面には前書通りの意を叙したのである。兩手に桃櫻と言ふのみでは平凡陳腐で何等の面白味もないが、草の餅と言つた爲めに俳興を添へ得て全面が生命を保つ事になつたのぢや。

示門人

子に飽こ申す人には花もなし

表面は或る人があつて其人が小供が大勢であつたか何んかで、小供の爲めには苦勞をします、小供には最早飽き〳〵しましたとでも言つたのに對して、小供に飽き〳〵したといふ人には花もない、と同樣ぢや、といふのを無いと言切つたのである。お前のやうな氣では花の面白味も興もないだらう、今少し氣を寛かに持つて浮世を輕ろく面白く見て樂まねばならぬ、世帶の苦勞ばかりするものぢやない、といふ意であらう。併し裏面は芭蕉翁が親で門人が子で、我れは門人の敎育には聊かも飽かぬ、多々益〻樂んで花を愛づる心と同樣に之を導きつゝあるとほのめかした處もある。

肅山が需にて探雪が畫きし琴の贊

散花や鳥もおどろく琴の塵

肅山より探雪の畫いた琴の圖に贊をせよと需めたから此句を作ると

いふ前書。

春も早や末つかた、花のちりかゝる頃、人は花に浮れ歩行いて、琴を弄ぶ事もせず、琴の上には塵が積もつてゐる、其處へ鳥が何時もの如くに訪づれて來て見ると、人は居ずに琴には塵が積もつてゐるので驚いて拍子ぬけをしたといふ意で、鳥を擬人法にして興じたのぢや。想ふに探雪の畫は人も居ずに琴のみが畫かれて居たのであらうが、其へ右の趣向を着けたものらしい。元來題畫などは畫に書いてある儘を句にせずに、其畫以外の事を樣々に連想して云ふ事が必要なので、その連想によつて畫に一層の趣を添へるやうになるぢや。此の題畫の訣も芭蕉翁が開祖をなしてゐる。

僧專吟餞別

鶴の毛の黑き衣や花の雲

僧の專吟といふ者が旅をする其の餞別の句。

鶴は尻の處に黑い毛がある、彼の赤壁賦などにも玄裳と言つてゐる、此の句は黑い毛衣を着た鶴が花の雲のあたりに飛びかふてゐると言つたので、鶴と花とを配合して一の景色を叙したのぢや。而して裏面には墨染の衣を着た坊主殿が此の春の花に浮かれて旅をして行くわいと言つたのぢや。或いは鶴の毛の黑き衣といふのを直ちに專吟の衣を形容したと解する者があるかも知れぬが、それよりも表面は實際の鶴と花との配合と見る方が詩趣が深いと思ふ。

露沾公にまかりて

西行の庵もあらん花の庭

露沾は大名で蕉芭翁が其の舘へ參上して此句を作つたといふ前書。

露沾公のお庭には花がある、此の花のお庭の中には定めし西行も住

むでゐるであらう、其の西行の庵は何處ら邊にあるのであらうかと戯れたのである。元來此の露沾公は富貴の人であり乍ら、風流の道に心をよせて雅致を解してゐた人であるから、其の德を暗にほめたたへて住居の趣も世に離れた風情があると申上げたのである。勿論西行の庵があるわけでもなく又た西行が現在居るでもないのを斯樣に打興ずるのが例の詩人の胸襟ぢや。又花の庭を吉野山と看なした心持もあらう。

顔に似ぬ發句も出てよ初さくら

初櫻を見て打興じた句で、初さくらは誠に愛らしく美くしくして年も取らぬ乙女のやうである。此樣な花に對してゐる自分も花相應にやさしき美しい發句をも吐きたいものぢや、我貌は皺だらけの武骨者で此の花には似てもつかない形ちであるが、せめて發句だけは自分の貌に似ず花に似よつたのが出てくれよ、と滑稽に言つたので一寸興ある句ぢや。

句空への文に

うらやまし浮世の北の山櫻

句空といふ人へ贈る文のはしに書いた句といふ前書。

うらやましい事ぢや、浮世の北で靜かに咲いてゐる山櫻は、といふのが表面で、裏面には句空が世を避けて閑靜に春を娛んでゐる境遇を慕はしく思ふといふのぢや。北の一字は浮世の外といふのを抽象的にせず何處までも現實の土地の如く、都の北隅といふやうに言つたので、北は陰で陽の反對即ち繁華に遠かるといふ意に過ぎぬ。尤もこの句空は實際都の北に居つたのかも知れぬが、實際さうでなくてもよろしい。

嵐山

花の山二町のほれは大悲閣

是れは實景其儘の句で、大悲閣は嵐山の上にある觀音堂である。櫻のさいてゐる嵐山を二町のぼつて行くと此處には觀世音が祭つてあ即ち大悲閣がある、といふ意で、花の山は櫻のさいてゐる山、二町のぼればとは其處の道を陳べて土地の關係と上ぼつてゆく自分のうれしい心持とを叙したもので、花と觀音大士の取あはせも面白く別段の工夫をも弄しないで却つて嵐山遊覽の趣を充分に言ひをほせてゐる。何人も此句をよめば共に花の山を歩行くやうな心持がする。

玄虎子か深川の旅舍を訪ふ

花見にとさす舟おそし柳原

玄虎といふ人が深川の宿に泊つてゐた、それを訪問しての句といふ

前書。

柳原とは今日の東京に於ける柳原で、昔しの江戸時代には柳が植わつて居る土堤であつた。芭蕉翁は此時に其の柳原通りを船で兩國へ下り、尙ほ墨陀川の流に從つて深川へ行つたものと見える。其處で此句は花を見ようと思つて舟を掉すのに其の舟がおそくてジレッタイ此の柳原あたりよ、といふ意で、春のことであるから川の流れのゆるやかな趣も眼前に浮ぶやうぢや。表面は右の如くであるが裏面には玄虎子を見るのを花を見るに比し早く會つて話がしたかつたが途中舟足がおそくてジレッタかつたと言ふのである。

櫻をばなど寢處にせぬぞ、花に寢ぬ春の鳥の心よ

花に寢ぬこれもたくひか鼠の巣

櫻のさいてゐる頃は其の櫻を寢處にすれば好いのにそれをせぬ春の

鳥はどういふつもりなんであらうか、といふ前書。

花に寢る鳥もある、花に寢ぬ鳥もある、その花に寢ぬ鳥のたぐひであらう此の鼠の巣も、といふ意。鼠はいたづらで趣の少ないもの、その鼠ぢやから何處迄も風流は知るまい、丁度花に寢ぬ鳥のやうぢや、といふので、鳥を責むる鋒先を鼠の方へ向け鼠を主とし鳥を客として、其實鼠から自然に鳥の方へあてつけるやうに言ひ做してゐるのぢや。これも一つの興を與へる手段である。又鼠よといふべきを鼠の巣といつた爲め天井などに芥屑の溜まつてゐる穢き有樣も眼に浮び暗に美しき櫻の梢に反應することになるのぢや。

上野の花見にまかり侍りしに、人々幕うちさわき、物の音小唄の聲さま〳〵なりにける。傍の松蔭をたのみて

よつ五器の揃はぬ花見こゝろ哉

江戸の上野の花盛りに行つて見ると、花見に來てゐる人々は幕など打ちめぐらして騒いで、さま〴〵の樂器の音や小唄の聲などがしてゐて賑かであつたが、自分は其の一方の松の木影を頼みとして其處に花をながめた、といふのが前書。

侘しき花見の心を叙したので、花を見る心にも樣々ある、自分は四つ五器で物の揃はぬ侘しき花見をする其の花見心かな、と言つたので、世人は皆な賑かな騒がしい花見ぢやが自分は淋しい花見ぢやと言つたのに過ぎぬ。さうして裏面には吾獨り世にすね世と離れて別段な花見をするといふやうな多少得意の意味も含むでもゐる、五器は五枚ある椀だが、それをよつ五器と言つたのは實際四ツの椀を持つてゐたのではなく食事道具も揃はぬがちと物の不足な生涯をいつた丈の事であらう。或いは故事又は諺でもあるのかそれらは知らぬ。

古沓や花の旅出のひろひはき

沓とは履物の總稱、こゝでは草鞋か又は草履の意であらう、其處で花見る旅出をするのにも履物の用意もなく、唯だ履き捨てゝ其處らにちらばつてゐる人の古い履物を拾ひばきをして氣輕く出て行く、といふ意で、誠に氣の輕い佗び人の境界をよく現してゐて、頗る興ある句ぢや。

聲よくはうたはんものを櫻ちる

花の散る時分の胸懷を叙した句で、前の顏に似ぬ發句も出よの句と同じく、多少滑稽的に叙したのぢや。花が散る、一ッ歌でもうたひたい氣になつた、此の落花に對しては聲がよかつたら是非うたふ所ぢや。といつたので、胸懷を丸出しに且つ無邪氣に叙した所は一寸面白い。

鐘きゝて花の香は撞ゆふへかな

花のさく頃の夕ぐれに入相の鐘を聞いた、同時に花の香が鼻をうつた、そこを櫻の花のかほりは此の遠近の靜かで入相の鐘を撞く夕部に勝つた時はない、それに限るといつたのであらう。此句の句法は少し變つて居て上五字から下五字迄何となく續き難い言葉である、が先づ上五字を特立させて讀むで、入相の鐘をきいた、と切り更らに下十二字で其感を叙して花の香は撞く夕部に限ると言つたので、二段落になつてゐると見ればやゝ分かるやうぢや。或ひは古歌でもあるのか。十分に解し得ぬ句ぢや。

山家

鶴の巣にあらしの外の櫻かな

山中に種々の木立があつて又櫻も咲いてゐる。其櫻の枝が又はその

邊りの木の枝かへ鶴が巣を作つてゐるといふ實景。それを重もに櫻に就て言葉を設けて、山中では兎角嵐に吹かれ荒ら〳〵しい中に此花を見るのぢやが今ま鶴の巣があるが爲め好い配合を得たので、嵐の外なる一種閑靜幽雅な櫻の風致を見らるゝことよといつたのであらう。是れも古歌などにありはせぬか。

半日の雨より長し糸さくら

雨の降る日に枝垂れ櫻を見た時の景色で、半日も降り續いて如何にも長く感じた其の雨よりかも糸櫻の垂れてゐる趣は更らに長く感ずる、といつたのぢや。半日の雨の感は時間に屬し、糸櫻の長い感は空間に屬してゐるので、此の異つた二者を比較するとは理性上には許されぬけれども唯だ長短といふ處より彼此を比したので、こゝらが詩興の詩興たる所である。さうして長さを比したのは言葉のあやに

過ぎぬので、眼目は專ら糸櫻が垂れてゐる、半日も雨が降りそゝいでゐるといふ雨と糸櫻とを見た興を叙した處にあるのぢや。併し個樣により長しなどとせず他により善き言現し方があつたでもあらうに。佳い句ぢやない。

歌よみの先達多し山櫻

山櫻を見た時の感じを叙したので、山櫻は歌よみの古人先達によつて既にいろ〳〵と咏ぜられ、山櫻の趣は最早盡きてゐるから今更ら後生なる余の贅言を費やす餘地もない、と言ふ意を斯樣にいつたのぢや。又先達とは通例先生先輩などと同樣に用ひられてゐる稱ではあるが、こゝは山櫻ぢやから、山の參詣の長老たる先達の事に思ひ寄せて其の名稱を用ひたものでもあらうが、兎角佳い句ぢやない。

二見の圖を拜みて

うたかふな潮の花も浦の春

伊勢の國の二見の浦の畫を見て讀むといふ前書。

潮の花とは海邊に潮先きの白く散るのを花と見立てゝ言つた語、その潮の花も亦た此の二見の浦の春景色の賞す可きものゝ一ッぢや、此趣が此浦の春景色の一つなる事を疑ふなよ疑ふまじと自分が此浦へ來ての感興を叙したのである。即ちうたかふなの五字は實にもといふ程の意味である。併し又た一面には二見の浦ぢやから伊勢の神をあがめ奉り吾心に疑念なく歸命頂禮するといふ意も含まれてゐるのである。

路草亭

紙衣のぬるごもをらむ雨の花

雨が降つてゐる、花が咲いてゐる、其の花の下に紙衣を着て佇んでゐるといふ場合で、餘りに雨の花の趣が深いから、よし紙衣は雨に濡れやうとも尙ほ花の下に居りたいと興じたのである。裏面には路草に對して何時迄も君の家に居りたいやうな氣がする、厚い待遇を謝するといふ意を含んでゐるのぢや。其日は雨が降つてゐたのであらう。

伊賀國花垣の庄は、そのかみ奈良の八重櫻の料につけられけると言傳へ侍れば

一里は皆花守の子孫かや

伊賀國の花垣といふ地は其昔し奈良の八重櫻保護の費用を徵する地に當てられてあつたと言傳へがあるので此句を讀むといふ前書。

此の花垣の庄の一里の人は何れも花守の子孫であるかや、さうであらう、扨も優美な人々の住む此里であるゆかしき事ぢやと咏歎した

ので、前書に對して見ると如何にも雅情の深い句である。

扇にて酒くむかけや散るさくら

花の咲いてゐる下に酒をくみかはしつゝある人がゐる、それに花がちりかゝつてゐるといふ客觀の景色を叙したのぢや。然るに唯だ酒くむ人に花が散ると言つたのみでは面白くない處から、其の酒をくむ人を能狂言中の人に見たてゝ、彼の狂言などで扇を持ちて酒をくむ手眞似などするのを思ひよせて扇にて酒くむかげやと咏じたのである、影とは扇から來た言葉ぢや。斯く言ひたる爲め一の詩的趣味を生ずるやうに成つた。先きには性格上より歴史中の景淸なる人物を捉へ來り、今度は體度上より古風な狂言を持出していづれも現在の事實を興あるやうに叙してゐる、芭蕉翁の着想に於ても修辭に於ても働きの多いには唯々驚く外はない。

似合しや豆の粉めしに櫻かり

豆の粉めしとは握飯に豆を挽いた黄色の粉をつけた辨當ぢや。それで其の豆の粉飯の辨當を持つて櫻狩に行くのは誠に似合はしい事ぢやと言つたので、元來櫻狩には今少し美しい重詰など持つて行くのが似合はしいので、豆の粉飯のやうな佗しいものを持つて行くのは寧ろ不似合なといつても好いのを却つて反對に似合はしやと言つて滑稽的に興じたので、佗び人が櫻狩の極はめて氣輕なさまが思ひ遣られる。

藤堂喬木子亭

土手の松花や木深き殿造り

藤堂喬木子は芭蕉翁の舊主の世嗣である。其の御殿へ行つて作つた句。

住居の周圍の土手に松並木があつて、松の奥に櫻の花が咲いてゐる、其の花の奥に御殿があるといふ景色で、即ち松の綠木深き處に花あり、花の隙間に御殿のほの見ゆるといふ處を斯樣に花や木深きと言葉を上下に錯綜して調子よく叙寫したのである。松の花說は惡い。

木のもとに汁も膾もさくらかな

花の下に酒など飲んだ時の興で、花が上より散りかゝつて、汁の中へも散る、膾の上へも落ちるといふのを詩的に誇張して其汁も膾も櫻になつてしまつた、實に總てが櫻であるわい木の下の酒宴はと言つたのである。

酒落堂記

四方より花吹入れて鴉の海

鴉の海とは近江の琵琶湖ぢや、酒落堂は其の湖邊にあつて、そこから湖を見渡した景色と見える。即ち廣い湖水の周圍から落花の風が吹いて湖上一面が花だらけに成つたといふのを、四方から花を吹入れてゐる此鴉の海、と詠じたのである。實に廣大に雄壯に且美麗な景色で、芭蕉翁の詩膽の大なる事も見える。唯だ實地の寫景にのみ孜々として居ては出來ぬ句で、實景以上に詩想を馳せて主客の兩觀を打破して一丸となし而して一種特別な客觀を現じて始て個樣な句が出來るのである。一たび此句を誦すると彼の杜子美が岳陽樓の詩集を愛誦して居たさうぢやが此句で其感化が見える。又此句は花を吹き入れて鴉の海が出來たのぢやと興じたものとも解されるが、それでは巧みな丈詩境が小さうなつて惡い。

路通がみちのくに趣く時

草枕まことの花見しても來よ

草枕は野山に臥す處より旅路の枕言葉ともなつてゐる。今ま君は旅に出るのであるが、其の旅中は他の總ての俗情を棄てゝ風流の道を辿り誠の花見をして見たらよからう、風流の心を錬つて誠の花見の眼を開いて歸つて來よ、と言つたのである。少々理窟くさい、殊に誠の一字が俗ぢや

萬乎別野

年々や櫻を肥す花の塵

年々花が落ちて木の下に堆くなる、其の落花の塵が腐つて櫻の木の肥しとなる、それで櫻が成長する、といふ一の詩的理想をうたつたので、頗る奇想ぢや。萬乎の家には櫻の木が多かつたのであらう、又た手入れもせず花は散るに葉は落つるに任せてゐるといふやうな

野趣も見えると思ふ。

花のかけ硯にかはる丸瓦

山中か又は人里離れた處へ花見に行つた時の即興で、料紙と筆とは持つて居つたが硯があやにくに無い、そこで落ちて居たかなんかした丸瓦を硯にかへたといふのである。作者が瓦を硯の代用にした事を瓦自身から硯の身代りをしたといつてゐる處が、詩的興味を助ける所である。

上醍醐

留守といふ小僧なふらん山櫻

上醍醐は京都の東、宇治の北にある里で寺のある處。

上醍醐へ行つて寺に僧を訪ねた、すると小僧が和尚樣は留守ぢやといつた、折節界隈に山櫻が咲いて居た、其處で其和尚は留守ぢやと

いつた小僧でもなぶつて遊ばうか此山櫻の下でと言つたのぢや。前にも人の留守を尋ねて垣穂の梅を主人と見やうとし隣のぢやと聞いて興をさましたといふ句があつたが、彼れは消極で、此句は積極ぢや。即ち彼の句は失望に終り、此句は尙進んで小僧をなぶらうといつてゐる。積極の方が詩として興が多い。

古郷このかみか園中に三草の種をもりて

春雨や二葉に萌ゆる茄子種

古郷のこのかみは古郷の兄松尾某其の園中で三草の種を蒔いた時に作つたといふ前書で、此句とあとの二句は皆なその時の句。折から春雨の時節であつた、この雨で今ま蒔いた茄子種が二葉に萌え出てるといふ未來の想像を現在として言つたのである。前書を取去つて獨立した句としても一寸趣がある。

この種と思ひこなさし唐辛子

此種即ち唐辛子は後ちには色赤く美しき實を結び且辛い味は人の舌をもヒリ、と痛める位のものである。それぢやから、ナンノ此數粒のチッポケナ種位がなどと漫りに思ひこなしてはならぬ、と興じたのぢや。

芋種や花の盛りに賣りありく

芋種は彼岸すぎに植ゑつけるもの、其處で芋種は此の花の盛り時によく賣り歩行いてゐるよ、と即事の句ぢや。芋種と櫻花との配合はマンザラ捨てたものでもない。

木白興行

畑うつ音やあらしのさくら麻

木白といふ俳人の所で俳句の興行があつた、其時の句である。

さくら麻は森植ゑる麻で、櫻の頃に柔かな芽を出すもの、此句は先づ作者が理想的に畑打つ音は嵐の如く否嵐となつて物の芽などを吹き動かすものぢやと定めて置いて、今や畑打つ音がトン〳〵として聞える、アノ音の嵐が小さなやさしい櫻麻を吹き動かすことである、いとしぼいことぢやといつたのである。音やのやの字は調子を助ける爲めの無意義のやで、音はといつたのと同斷。

伏見西岸寺

我衣に伏見の桃の雫せよ

桃は伏見に桃山といふ所があつて名所になつてゐる。其の伏見の桃のうつくしき雫が我衣手にかゝれかし、かゝつてくれよ、といふのを雫せよとやさしく言つたのである。

煩へば餅こそ喰はね桃の花

桃の花が咲いた、自分は煩つてゐるから餅こそ食はぬが、桃の花は桃の花ぢや、此病中でも氣がうきうして來た。といふ位の事であらう。

尙白と浪花へ下る

只一夜桃に宿かる木幡かな

尙白といふ門人と近江から大阪へ行つたものと見える。

木幡は大津より伏見へ行く道の里である。そこで此句は唯一夜だけ木幡で宿つた、折節桃が咲いて居た、といふのを桃に宿かると興じたので、必ずしも桃を主人としたといふ程の意味でもなく又桃の爲めに態々宿つたとも見ず、偶然桃の花の頃そこへ泊り合せたといふ位に解して置くが好い。是れはにの字に於ける一種の意義で俳句には度々用ふることである。

古寺の桃に米ふむ男かな

田舍寺か何にかで古い寺がある、桃の花がさいてゐる、そこに男が米を踏みつゝある、といふ客觀の景色を叙したので、此にの字も桃の爲めにふむといふのでなく桃のある傍らにといふ位な輕い意、又た哉も男の働いてゐるのに感じたなどといふ咏歎でなく男ありといふ位の意ぢや。純客觀の句で一幅の好畫圖である。

舟あしもやすむ時あり濱の桃

どこかの海岸を舟でゆく時の景色でもあらう。岸には桃が咲いてゐる、海には舟が行きつゝある、空は春日和であたゝかく何となくゆつたりとしてゐて、舟足も何となくぬるく行くやうに思はれる、それを舟足も休む時ありと言ひ、海岸であるから濱の桃と言つたのである。如何にも長閑な趣が思ひやられはするが、休む時あり抔と言つたので少し理窟らしく聞こえ詩として價が減少した。

はるけき旅の空思ひやるにも、いさゝかも心にさはらんものむつかしければ、日頃住みける庵を相知れる人にゆづりて出てぬ、此人なん妻を具し、むすめ孫など持る人なりければ

草の戸も住替る代ぞ雛の家

遙けき長途の旅へ出る其の空を思ひやるのにつけても、少しなりとも心に障るものがあつてはむつかしく面倒なから、日頃久しく住んだ庵を、心知り合つてゐる人に讓渡して旅に出た、其の人は妻女もあり、娘や孫なども持つてゐる人であつたから、といふ前書。草の戸は自分の麤末なる庵、其樣な庵でも移り變る代の數には洩れず主人も替はることゝなつて此度は雛の家に成つた、といふので、

娘を持つ人だから雛祭をするであらう、自分の住みし時とは異なつて、雛など立てるやさしい庵になりゆくのぢや。さても世の中はさまゞ〳〵なものぢやと打興じたのである。住替はる代ぞと言つたのは少し解説に過ぎてゐるやうにも思はれる。

重三

青柳の泥にしたゝる〻汐干かな

重三は三月の節句、汐干の日である。其の汐干潟に青柳がふさ〳〵として垂れて、泥にしたゝつてゐるといふ即景、柳の青いのが黑い泥にしたゝつてゐるなどは一種かはつた景色で面白い。

おどろへや齒に喰ひあてし海苔の砂

海苔を喰つた、其の中に砂があつた、それを齒にかみあてた、齒が其の爲めに苦をうけた、若者の齒ならば左迄でもあるまいが年をとつては斯許の砂にも苦しい感を起す、年をとつてはいけないものぢや、ア、自分も衰へたわい、と咏歎したのである。即ち海苔の砂をかみあてたらいふのではなく、海苔の砂をかみあて〻苦しいと感じた爲めに我老衰の事をも思ひ出でたのである。

老情

蠣よりは海苔をは老の賣りもせで

老いて事物のものうき胸懷。

一人の老人が蠣を賣つてゐる。斯樣にかど〳〵しく重いやうな蠣などは賣らないであつさりと手輕い海苔の方を賣つたらよさ〻うなものぢや、さてさて御苦勞千萬である、といふのが表面の解。裏面には自己の物うくなつて又た世にたづさはらず氣樂な境界を求めつつあるのを他人に事よせて戯れ歌つた心持もあらう。山家集に、同じ

くは蛤をはさして干すべきに蛤よりは名も便りあり、とある由。措詞はこゝから來たのぢや。

淺草千里が許にて

海苔汁の手際見せけり淺黄椀

此句は千里が饗應になつた挨拶で、海苔汁は實にうまかつた、一番料理の御手際を見せられたわい此淺黄椀で、といつたのである。淺黄椀とはよく分らぬが、其名稱だけでも海苔汁に調和が好い、淺草住居の人故殊に其名產の海苔汁を賞した意もあらう。

あけぼのや白魚白きこと一寸

此句は如何なる場合であるか、句中には現はされてゐぬ。併し全體から想像すると、白魚の網を引く場合に最もよく適してゐる景色らしい、即ち曉の薄ぐらいのに白魚が網にかゝつて取れた、それが白

く見える、其の白さが一寸許の白さであつた、といふので、小さい白魚をよく形容してゐる。場所の明瞭ならぬのは聊か遺憾ぢやが、此句の主眼は白魚を現はすにあるから、白魚の既によく現されてゐる以上は其の目的を達してゐるものと言つて好い。凡て俳句を評するに、周圍の關係のわからぬのをとがめることぢやが、此句のやうな時には強ちにとがめずともよい、よく場合々々を知らなくてはならぬ。

常陸下向に江戸を出る時送りの人に

あゆの子の白魚送るわかれかな

春も早や白魚はすんで鮎の子が出るやうになつた、其の鮎の子が白魚を送つて別れをしてゐる、といふのが表面の意で、裏面には自己を白魚に、送人を鮎の子に比してゐるのぢや。別を惜しむことなど

は少しも叙せずに譯もなく季節の物で滑稽的に口ずさんだところは實に詩人の雅懷である。

蛭蜆子圖賛

しら魚や黑き目をあく法の網

蛭子とは惠比壽樣、それの賛ぢや。

惠比壽は神樣、法の網は佛に救はれるといふ佛法の事、それを神樣に持ち來つたのは神佛混合の時分であるからであらう、さて句の意は、白魚が網にかゝつて小さい黑い目をあいてゐるわい、といふことで、其の網を法の網と呼び、白魚が有り難い法の網にかゝつて黑い目をあけた、と興じたのである。さうして裏面には蛭子の神德により人々の利益を被るといふ意を含めてゐるのぢや。元來蛭子は鯛を抱いてゐる神樣、普通ならば季節の櫻鯛などについて咏す可きぢやが、却つて白魚を持つてきた所が即ち詩的趣味の存ずる所である。併し全體に多少理窟くさくて、佳句とは言はれぬ。

よし野を下る時

飯貝や雨にとまりて田螺きく

飯貝は地名、そこへ泊つての句と見える。

飯貝といふ所で雨の降る時分泊つてゐて田螺の鳴くのを聞いたといふ即興。雨に泊るとは雨の爲めに泊るのでなく、雨の降つた折柄泊つたといふ意で、前にあつた桃に宿かると同樣ぢや。

古池や蛙飛込む水の音

人口に膾炙してゐる句で、解釋も樣々にある。子規居士の曾て說いた如く、此句は芭蕉翁の面目一新して所謂正風をなした一句で、餘り佳句ではないが、詩的の句を作り始めた首途であると思ふと何と

なく吾々の注意を喚起する。

古池があつて蛙が飛込んでヂョブンと水音がしたといふだけで、景色其儘を叙した所に詩的趣味を存してゐる。併し此句が芭蕉翁集中で價の多いものでないことは無論なので、芭蕉翁及び門人等に於ても後世に至つて此句を斯くまでに貴重せられ且種々意外なる解釋を受けやうとは期してゐなかつたであらう。其證據は此句が出來て間もなく門人の手で春の日集といふが出版されて此句も其春の部に乘つてゐるが、何等別段の待遇をも受けず、數多の句中殊に門人等の句の末に碌々として顏を並べてゐる。此一事を見ても芭蕉翁を始め門人達が當時に於ける考へは矢張吾々が今日解する如くに解して居て別段有り難い勿體ない句ぢやとは決して思はなかつた事が明瞭である。

蛙子は目すり膾をなく音かな

目すり膾とは蛙を以てこしらへた膾で隨分昔しは妙な食物もあつたものぢや。それで蛙子の啼く音は如何にも悲しげな、目すり膾になるために啼く音である、と一寸興じたので、己れが遂に目すり膾になるといふことか、其親や朋輩が既に目すり膾になつたといふことか、兎角微物ながらも其行末を悲んでゐる情況を詩的に觀察したのである。一誦して哀れに又滑稽を感ずる句ぢや。

まごふごな犬ふみつけて猫の愛

戀猫のさまを咏じたので、元來猫は犬を恐れるものであるのに、さかり時で戀に身を委ねてゐる爲めに前後も忘れて、恐ろしい犬の上を踏みつけて心も惑ひ狂つてゐる、といふ實況で、踏みつけるは實地犬を踏むのではなく、寧ろ犬のあたりを飛越すなんかしてゐる樣

と見てよろしい。猫の戀につき一種の興じ方で、まとふとなの一語は芭蕉翁が興じ笑つてゐる貌も見えるやうぢや。

田家

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻

これも猫の戀を叙したので、常にも麥飯を喰つてゐる上に、此節は又た戀にやつれて疲せてゐるぢやないかと、猫の妻にからかつた心持である。戀にやつるゝといふのをやつるゝ戀と顚倒して叙し、而して戀のみか麥めしにもやつれてゐるといふ意を持たせた巧みな叙法である。即ち麥飯といふ下に尙ほ多少の言葉があるものとしてよんで始めて此の意義を領得することが出來るのぢや。

猫の戀やむ時ねやのおぼろ月

春の夜に外では戀猫がギャアー〳〵言つて騷いでゐる。其内に何處へ

行つたのか俄かに靜かになつてその騷がしいのもやむだ。其時丁度朧月が閨の内から見えたといふ意で、閨は猫の閨でなく人間の閨である。即興の句で閨のおぼろ月は人間の戀にも連想が係つて何となく情味のある句ぢや。

膳所へ行く人に對して

獺の祭見て來よ瀨多の奥

膳所は瀨田からは一里許りで琵琶湖に瀕した地名である。獺の祭とは禮記の月令の獺が魚を祭るといふことで春の季節になつてゐる。其處でお前は今ま膳所へ行くのぢやが、其膳所の邊の瀨田の奥には今頃定めし獺の祭があるであらう、お前はそれを見て來いよといふ意である。一寸滑稽で無邪氣な句ぢや。

山路來て何やらゆかしすみれ草

山路へ來て見るとすみれ草の花が何となくゆかしい心持がするといふだけの意ぢや。其儘の感を現はしたので普通の句ぢや。

悼呂丸

當歸よりあはれは墳のすみれ草

當歸は草の名で、歸るべしといふ意から漢詩などには留守中の人が旅中の人に歸れといふ場合などによく用ひてゐる。其處で呂丸といふ男の墳へ行つて見ると會ふあはれな菫が咲いてゐる、その菫は彼の歸るべしといふ當歸が茲處にあるとして見ても、それよりは一層あはれに感ぜらるゝといふので、唯だ草と草とを比して其時の感を叙したのに過ぎぬ。呂丸は菫のやうな愛らしい人であつたと見える。

よく見れば薺花さく垣根かな

薺の花は小さい白いもので、殆んど目につかない程のものぢや。そこで、よく氣を留めて見ると薺の花がさいてゐるよアノ垣根に、と言つたので、一寸とした事であるが、よく薺の花をあらはし且つ自然な場合を見付けてゐる。

團角扇に賛を望むに

前髪もまた若草の匂ひかな

前髪のある若い者であつたと見える。前髪の未だ若々しいといふのを時節に求めて若草の匂ひと比擬し、お前の前髪は未だ若草のやうに匂ほやかぢやと言つたのである。若草とは若いといふにかけて季節のものを藉りたのに過ぎぬ。

菩提山

山寺のかなしさつけよ野老堀

野老は草の名で根を堀つて食物にするものぢや、其の野老を堀る者

の如何にも淋しい味を持つてゐるのを山寺の淋しいのに思ひ合はして、野老堀の翁よ此山寺のさびしき趣を告げ知らせてくれよ、と言つたのである。實際其處に野老堀の居たか否かは知らぬが、よし居なくとも叙景の必要上一寸配合の好い或る物を捉へ來るも差支ない。

捨ものに梨の接木や山やしき

山中の或る別莊に接木のしてあるのを見て咏じたので、捨ものにとは特別に接木をしたといふでもなく、ホンの捨てた心持といふやうな、意其捨物の氣で梨の接木がしてあるわいアノ山の屋敷に、といふのである。捨もの〻と言つたので山邸の趣がよく現はれてゐる、斯樣な言葉を使ふ處芭蕉翁も中々ぬかりがない。

茶店二句

つゝし生けて其かけに干鱈さく女

山か何かの茶店に折しもつゝじが生けてある、其の傍に干鱈をさきつゝ茶店の女がゐる、といふ即景である。全體の句法が頗る佶屈で前後の句の叙寫法と趣を異にしてゐる。芭蕉翁が曾て虛栗集調を他の人達と共に作つた時代の口氣が會〻出て來て一句戯れにやつたものかとも思ふ。併し字餘りの句になつてゐるに拘はらず吾々讀み去つて左程長いとも思はず、又佶屈ながらも左程口調の惡くは感ぜぬ。虛栗集の多くの句に比すると體こそ似たれ大に別種の趣がある。何故かと見るのに、此句十九字の音中で大分五十音の同列が續いてゐるのが第一の理由だらうと思ふ、即ちッ、はウ列、ジイはイ列、ケテはエ列、ソノはオ列、ニヒはイ列、タラサはア列、と總て續いてゐるから讀み易いのぢや、字餘りの句は一々に斯樣にする必要はな

いが、是亦た句作上一の心得とすべきものである。

菜畑に花見貌なる雀かな

これも茶店の句であるが、唯だ打見た儘の趣ぢや。菜の花のさいてゐる畑に雀があちこちと遊んでゐる、それを擬人法にして菜の花を見てゐるらしい貌をしてゐる雀かなと言つたのぢや。一寸即景の句として面白い、殊に何々顔などいふ言葉は蕪村など盛んに使用してゐるがこれも芭蕉翁が例を與へたのと見える。

隣庵僧宗波旅に趣かれけるを

古巣たゝあはれなる可き隣かな

古巣とは春の鳥の巣といふ季で讀んだので、鳥の巣のこと乍ら、隣庵の僧の住居になたつてゐる。お前が住んで居た爲め隣の我れも是までは淋しくなかつたが、今ま旅に行かれるので是から一人となつて淋しいからお前の住んで居た唯だ古巣ばかりをあはれがり戀しう思ふことであらう、此隣の我れは、といふ意、送別に關する感興がとよく叙せられて居る。

原中や物にもつかす鳴雲雀

原中に雲雀が一羽高く啼いてゐる、其樣が何もたよる可きものもないやうぢやといふのを物にもつかずと叙したのぢや。如何にも廣漠たる原の中に囀つてゐる雲雀のさまが想はれて、大きな景色を上手に叙して居る。

なかき日もさへすり足らぬ雲雀かな

雲雀の盛んに鳴く趣を叙したので、春の永日も囀りたらぬかのやうに啼いてゐる雲雀ではあるわいと言ふたので、足らぬの三字で日永の春の野のさまを現はしてゐるのぢやが、ながき日もといひさへず

り足らぬといふのは前句と反して上手な叙法でない。

雲雀より上にやすらふ峠かな

峠で休む、すると自分の足元より下に雲雀が啼いてゐるといふので、やすらふ峠とよむのでなくやすらふと峠とを離して意を取る可きは勿論ぢや。此句は奇想を構成しやうとして未だ痕跡あることを免れぬ。

ひはり啼中の拍子や雉子の聲

雲雀と雉子と二つが鳴く聲を配合したので、雲雀は絶えず鳴いてゐる、其間に時々雉子の高い調子の鳴聲がする、それが丁度雲雀の鳴くのに對して拍子を取つてゐるやうぢや、といつたのである。拍子やとは突然たる言葉で多少俗意もあつて或いは月並のそしりを免れないなど思ふ人もあらうが斯樣な場合に思ひ切つて言ふ所は中々俗人に出來ない事で、何處迄も芭蕉翁の膽略が見えて厭味を免れる。

高野にて

父母の頻りに戀し雉子の聲

高野山で作つた句と見える。折ふし高野山で雉子が啼いた、其聲をきいて父母が頻りと戀しく成つた、といふのぢや。文章の上から直解すると父母が頻りに戀しかつた時に雉子の聲がしたとなるけれども、斯かる場合には文章を如何に解せば句意が明瞭に取れるかを考へて前言つたとほりに上下顛倒して解す可きである。蓋し高野山には夥多の道心が妻子眷族と相離れて入り込んでゐる、木石ならぬ人間のことであるから或場合には故郷の父母の事も思ひ出すであらう、やけ野の雉子夜の鶴といつ

てゐるから、其の雉子の聲を聞けば殊更ら父母の事も思ひ出るであらう、と作者が此山へ來て偶然に感じたから此句が出て來たのであらう。併し右は裏面の意味であつて表面は飽迄も芭蕉翁一人の感想を叙したものとなるので、且つ翁も固より人間であるから一山の僧侶の御相伴をしてゐることは勿論ぢやや。

蛇くふと聞けは恐ろし雉子の聲

雉の蛇を喰ふとは事實であるさうなが、併し一面には雉子は春の野のやさしい美しい鳥としてある。そこで其のやさしい鳥が蛇を喰ふのぢやと聞くとアノ鳴いてゐる聲も恐ろしいやうな感じがする、といふのぢや。根本に理窟を帶びてゐる所があるから俳句としては價がない。

煤ほりて埃たく家になく燕

百姓家見たやうな佗しい家であると見える。即ち埃など色々の物を燒くから煤ぼつてゐる、其家の軒端に燕が巣喰つて啼いてゐるよ、といふのであつて、佗しい家に燕といふ配合を取つたのぢや。佳句ならず又た惡句でもない。

雀子と聲なきかはす鼠の巣

これも百姓家かなんかの趣で、雀が巣をつくつて子雀がないてゐる、鼠も巣に居て鳴いてゐる、雙方が巣で啼きかはしてゐる、といふ景色である。即ち最初には雀子と置き其の雀の子は何處でなくかと思ふと終りに鼠の巣と言つたので雀子も巣でないてゐる事がわかるし、又た聲なきかはすと言つたので鼠も亦た其巣で雀と共に鳴いてゐる事がわかる、ツヾメテ言ふと、雀の子も巣にありて鳴く、鼠の子も巣にありて鳴く、雙方が互ひに鳴いてゐるといふことになるので、

斯様に巧みな言現はしは叙寫法の手段として注意する價値がある。

莊子書贊

もろこしの俳諧問はん飛ふ胡蝶

莊子とは支那の隱逸者、其の書は莊子が寢臺に横はつて其上に蝶の飛でゐるのが多いが、此れも左様な畫であらう、即ち莊子が夢に胡蝶となつて、蝶が莊子か、莊子が蝶か、どつちだか分からぬと自分で言つたのから來てゐるのぢや。

唐土の俳諧はどんなのであるか語つて聞かせて呉れ蝶々よといふ意で、全く蝶に戯れてゐるのぢや。併し裏面には莊子に對して問うたのであつて、蓋し莊子は儒者と異違ひ世を脱して天地萬物を齊く見做し或いはそれを玩弄して居る、それが俳諧の趣に似通つてゐる所から斯様な着想を得たのであらう。莊子の畫贊としては多少の興がある。

物好や匂はぬ草にとまる蝶

蝶の草に止まつてゐるのを見て、其の草には匂ひがないのに、それに止る蝶は何の氣であるかわからぬ、物好きなことぢやといふ意、物好きやと言つた無頓着の處は好いが、匂はぬ草とは如何にも理に落ちてゐる、芭蕉翁の集中に於ても惡句に屬する。或る派などは斯様な所から弊を來したのであらう。

乍木亭

蝶の羽の幾度越ゆる塀の屋根

蝶が塀の上をアチコチ飛んでゐる所の即景ぢや。蝶のやうなやさしい小さい脆げな羽でマアよくも塀の屋根を幾度も越ゆることよ、といふ意である。いかめしき塀に對して蝶のあちこちと越え去り越え

來る所を見付けて咏じたので、一寸情はあるが幾度越ゆるの詞が此場合としては堅く重も過ぎるやうぢや。

起きよ〳〵吾友にせむぬる胡蝶

寢てゐる蝶々よ、起きて來よ〳〵、吾友にして諸共に遊ばうぞよ、といふので裏面には莊子の蝶より思ひ起して莊子と自分と趣味合するといふ意もあらうか。あまり佳句ぢやない。

畫賛

裾山や虹吐くあごの夕つゝし

裾山に今ま虹が立つてゐた、それが消えたかと思ふと其跡に躑躅が紅に咲いてゐる、それに夕日があたつてゐる、といふので、畫は山と紅いつゝじとがあるのみであらうが、それへ色の關係から虹吐く跡と畫以外の趣をつけたのらしい、題畫の一の心得として置てよい。

西河

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音

西河の瀧と言つて吉野。

瀧の音がはげしいのでそれにより山吹もちるだらうと思ひやり、其の山吹の散るのをほろ〳〵と形容したのである。散るかのかの字を入れた爲め少し興を失つてゐる、寧ろ純客觀的に山吹が散つてゐると直叙して疑問を加へぬ方が面白かつたであらうに。

畫賛

山吹や宇治の焙爐の匂ふごき

畫は山吹が書いてあつたのか、或いは茶を焙ずる畫かわからぬが、山吹が咲いてゐて美しい折柄宇治も茶を焙ずる時で其香をきくといふ興である。或いは今一歩進めて茶の出花の黄色なのと山吹の花の

色と似てゐる所から斯樣に配合したのぢや、との說があるが、そこ迄穿鑿しては句が惡くなる。

山吹や笠にさすべき枝の形

山吹の花のさいてゐるのを見て、アノ一枝を折つて笠にさして見たら面白いであらう、たわ〳〵とした枝のさまが如何にも笠にさすに適してゐる、といふて打興じたのみである。

大和行脚のとき丹波市とかやいふ所にて日のくれかゝりけるに藤の花おぼつかなく咲きこぼれけるを

草臥れて宿かる頃や藤の花

大和の國を行脚をした時に、丹波市とか言ふ所に來て日の暮れになつた、丁度其處に藤の花が薄暗く心細げに咲いて居たればといふ前書、咲きこぼれるとは滿開といふ位の心持。

藤の花は淋しく明かならざる夕暮れなどに何となく趣のあるところから、草臥れてしまつて宿をかりたき夕方の頃丁度其花を見たが、自他共に哀れぽかつたと即事即感を叙した句である。

暮おそき四ッ谷すきけり紙草履

紙草履は昔し紙屑で作つた麁末な草履ぢや。暮おそきは春の日の永い時節、其の時に江戸の四ッ谷を過ぎた、恰かも自分は紙草履をはいて居た、といふのである。此句の趣は餘り分明でないが、想ふに暮れおそきは長閑な心持、紙草履は佗しき樣、四谷は當時屋敷町で淋しい處、此三つを配合して何となく春の日永の夕ぐれの趣を現はしたのぢやと見て置て差支なからう。

峰入や一里おくるゝ小山伏

峰入とは春季に大峰葛城などすぎ紀路に出でるのを言ひ修驗者山伏

などのやつたもの、秋季に紀路より大和の方へ出づるのを逆峰入といつた。

此句は峰入の狀況を叙したので、小山伏が足重げに一里許も跡になつて行きつゝあるといふので、一人ゆく小山伏のさびしげに且つ哀れなる樣と山深く谷幽がなる景とが目に浮ぶやうに思はれる。

此筋に望まれたる茅舍の畫賛

葎さへ若葉やさしや破れ家

此筋は人の名、茅葺の家の畫の賛ぢや。

茅葺のあれたる家がかいてあつたと見える、其處で折節草若葉の頃であつたから葎の若葉を藉り來つて佗しゝ淋しきさ葎へ若葉する頃はやさしく思はれると言つて破れ家の周圍にある景致を叙したのぢや。葎さへと言ふさへの二字が多少理窟に落たのみならず着想も平凡である、惡句ぢや。

二葉軒

藪椿門は葎の若葉かな

二葉軒といふ所を尋ねた時の趣を其儘に叙したものと見える。藪の中には椿がある、ソシテ門前には葎が若葉をして青々と茂りかけてゐる、といふので、如何にも田舍か又は別莊などにありそうな景色ぢや。其内に住む人物までが想像せられる。

逢龍尙舍

物の名を先こふ荻の若葉哉

龍尙舍といふ人に逢つた其時の句。

逢ふとゆきなり先づ色々物の名を問ふた、其時に季節柄で荻の若葉も生い出でてゐた、それを配合してよんだので、歌に難波の芦も伊

勢の濱荻とあるから物の名を問ふこと荻とは多少關係がある。或いは龍尙舍が伊勢人でゝもあつたか、又本艸家などか、それはどちらにせよ配合が一寸面白い。

附記、一本の前書には有職の人物知故實家なればとある、左すれば此句の意は一層分明。

行春に和歌の浦にて追付たり

行春とは春の過ぎ行かんとする頃をいふので、其の春の過ぎ行かんとするのを人と見て擬人法を用ひ、行春に和歌の浦で追付いたと戯れ歌つたのぢや。芭蕉翁が吉野より紀州に出た時は未だ春も全く盡きずに居たから特に和歌の浦といつたので、多少の滑稽もあつて面白い句である。

留別

行春や鳥啼魚の目は涙

行春の時分是れより春にわかれるのぢやと言つて鳥もなき魚も目に涙を垂れてゐる、鳥も魚も行春を惜しみつゝあるといふのぢや。而して裏面には自分と留まる人との惜別の情を叙したことは勿論である。此句も貞享以前の口氣があるやうな。或る解の如く杜甫の春望は引かずとも。

田家に春の暮れを佗ぶ

入相の鐘も聞えず春のくれ

常は入相を聞くのであるのに、此の春のくれは田家に居て鐘の音も聞かずに春がゆく、氣も心も何となくうつとりしてゐるといふ處を言つたのぢや。前書の佗ぶとは即ち此意。

鐘つかぬ里は何をか春のくれ

此句も亦た前の句と同樣で、前のを更に言ひ替へたのであるらしい。此の春の暮に於て鐘をつかぬ里は何をたよりとするのであらうか、鐘つけばこそ夕ぐれも知られ春の暮に氣もつけといふ意、春の夕ぐれは何時くれるともわからぬやうな氣持を現はしてゐるのぢや。前句と此句を比するに、前句は鐘も聞こえぬと消極で、此句は鐘つかぬ里は何をかと積極の着想ぢや、積極の方が引立つてゐるが併し何をかと言ふのは少し耳立つて聞こゐる、二句共に感じの乘らぬ句ぢや。

望湖水惜春

ゆく春を近江の人と惜しみけり

芭蕉翁が近江の琵湖の傍らに住み湖水を望んで春の行くのを惜むだ句ぢや。

最早春も末になつて夏が來らうとする、今迄は春の繁華をたのしむだのであるが、それも最早げふ一日を限りぢや、折柄こゝは近江國、ア、此國で此の春の行く頃に出逢つたナーと言つたのである。言葉の上からは近江の國の人と語りあひつゝ春を惜しむやうであるが、其實は自分が近江の國に居た所から、近江の國に住める總ての人と共に春を惜しむ心持なのぢや、皆人も同じ心であらうと思ひやつたのを實地にさうぢや共に惜んでゐるのぢやとして居る。着想が如何にも大きくて行春などの茫然とした觀念に最もよく適つてゐて且つ趣味の深い句であると思ふ。是れで春季の結末が振つた。

夏之部

ひとつ脱いて後ろにおひぬ更衣

更衣は夏四月に行ふ昔しから行はれた儀式で民家にも慣習に成つて居た。此句は旅中に於て更衣をするといふ樣を叙したので、即ち旅中であるから今迄着て居た着物を一枚だけ脱いで、それを後へ荷物として負ふたといふ意であつて、行脚生涯の脱俗して氣輕な有樣がよく叙せられてゐる。更衣としては一風變つた趣向であるのみならず芭蕉翁の面目のあらはれてゐる佳い句である。

夏來ても唯だ一つ葉の一つかな

初夏の趣を一ッ葉によりて打興じた句で、一ッ葉は一莖に一枚の葉があるもので、春夏秋冬何時見ても同じことである。併し初夏であつて、他の總ての草木は皆な若葉を出して生ひ茂る頃だから一ッ葉にも何か少しは變化のありそうなものぢやに、相變はらず一ッ葉でゐるわいと戯れたので、何の理窟もなく輕く言つた所に多少の興味を具へてゐる。

奈良にて

灌佛の日に生れあふ鹿子かな

灌佛は四月八日即ち釋尊の誕生日で其茶を佛像に灌く事、鹿の子は夏季に生れるもの。其處で此二つを思ひ寄せて尊き釋迦の降誕したまふ其の灌佛の日に丁度生れあふた、さても冥加な鹿の子かなと言つたのである。これも實際其日に生れたのを見たとせずとも、生れあふ鹿子もあるであらうと想像してそれを實際あつたと言つたものとしてよい。又た生れあふといふには、佛の生れた日だから從つて

其の御縁で成佛の便りにもなるであらうといふ意も多少含まれてゐると見るのもよいが、あまり深く其方へ傾くと惡い。折から奈良の寺の多い所で、四月八日に當つたから即景を咏じたものとし、裏面に右の仕合者といふやうな心持をホンの微かにが興じてゐるものと見るがよろしからう。

灌佛や皺手合する珠數の音

釋尊降誕日に寺の有樣を見て興じたものと見える。即ち灌佛する前で老人が皺だらけの手を合せて拜むでゐる、其の手に珠數を繰つてゐるので其の珠數の音がする、といふ即景ぢや。此句の如きは今少し巧みを弄して叙する時は却つて厭味を生じたかも知れぬが、唯だ單純に事實其儘を叙し且つ其拜んでゐる老人を笑つたやうな心持になつてゐるから詩興を起させる事が出來たのぢや。

招提寺

若葉して御目の雫ぬぐはゝや

招提寺は奈良の西の京といふ所にあつて、鑑眞和尚といふ盲目になつた高僧の御影がある寺ぢやさうな。

右の寺で和尚の御影を見てよんだので、夏に成つて若葉がしてゐる、其若葉の露が御影の御目に雫となつて垂れてゐる、拭うてあげたいものぢやと戯れたのである。高僧に戯れるなどは全く詩人の興で、こゝらが所謂詩は道德や宗教に關係のない證左である。芭蕉翁の如き道德家又た信仰家といへども詩を作る時には斯樣に神佛や高僧などを玩んで居る所がをかしい。

日光山

あらたふと青葉若葉の日の光

日光の廟を拜しての句ぢや。

あら尊い難有い事ぢや青葉や若葉にさしてゐる光りは、といつて客觀の景色を叙したと見るのが表面、裏面には無論日光の神德を尊ぶ作者の心情を述べてゐる。日光であるから日の光りとたゝへた處など餘りにつき過ぎてゐて佳い句でない。

裏見瀧

しばらくは瀧に籠るや夏のはじめ

これも有名なる日光の瀧である。

夏はゲと音でよみ初夏から百日の間、夏行又夏籠と言つて閑居して寫經などすること、そこで暫くの内は此涼しく淸い瀧の中に於て籠ることであるよ夏行百日の手初として、といつたので、彼の裏見の瀧は裏へ廻つて覽ることが出來て且つ折節初夏である處より瀧の中へ夏籠りするといふ感興を得たのである。芭蕉翁も中々おどけ者ぢやゝ

おもひ出す木曾や四月の櫻狩

或る四月の季節に不圖思ひ出した、さる年木曾の山中に旅した時寒氣の强い所だけに此四月に入つて櫻狩をした事があつた、といふのである、餘りに平凡な着想であるが、よく考へて見ると、或は今まで實際に何處かで四月に入つて櫻狩をして居て、そこで木曾の往事を思ひ出したと言ふやうなことでもあらうか。何れにしても面白くない句ぢや。

甲斐山中二句

山賤の頤閉る葎かな

此句は一寸解釋が出來難いが、芭蕉翁が甲州へ旅したのが天和二年で即ち正風以前だから此句の奇僻なのも怪むに足らない。然らば如

何に解するかといふに四つ解し方がある。葎の茂りを形容して恰かも山賤の顧を閉ちたやうなむくつけな草ぢや、といふのが第一。次には山賤が物を言ふ其顧をも閉ぢしめる程の葎の茂りぢやとするのが第二。又た山賤が居て芭蕉翁一行に對し何か行違があつて惡罵したので、それを誡めたかどうかして荒くれた山賤も其の爲めに默した、其時恰かも葎が茂つてゐたとするのが第三。又た芭蕉が山賤に何かを問ふたが山賤は默然として返答をしなかつた、其傍らに葎があつたとするのが第四。以上先づ四個の解し方がある、而して正風以前とすれば第一第二、若し正風以後にも甲州へ旅したとすれば第三第四のどれかが適ふやうに思はれる。何れにしても不明瞭な句ぢや。

ゆく駒の麥になくさむやとり哉

此句も亦甲斐國山中の趣で、ゆく駒とは行きつゝある駒だがこゝでは旅する自分の乘つて居る駒のことであらう。そこで此句はゆく駒が途々左右の畑に青々と生ひ立てゐる麥に對して心を慰めつゝ或る驛舍まで着いたと云ふので、ゆく駒と云ふ語には自然乘者が主と爲てゐて實は己が慰んだ心持になるのぢや。尤もどこか着想の不慥で措辭も落付かぬ處はあるが、それは前の句と共に正風以前の句とすれば怪しむに足らぬ。

青さしや草餅の穂に出つらん

青さしとは麥菓子で五月五日の節物、草餅は蓬で作る三月三日の節物。そこで今ま青さしの菓子を見て、早や青さしを喰ふ時ぢやが彼の三月の草餅を作る蓬も今頃は多分穂に出た事であらう、と咏じたので、青さしを咏じ乍ら下十二字は全く草餅の事を言ひ而して其興が青さしに戻つて來るのである。今一つの解釋は五月五日に青さしを

喰たが三月三日に喰つた草餅の事を思ひ出して、此の青さしは彼の草餅が穂に出たのであらう、草餅の穂に出たのが此の青さしになつたのであらうと、實際ソンナ事のないのは知れ切つてゐるけれども、あどなく言つて打ち興じたもの、と解するのぢや。此方が面白いかも知れぬ。

逢桑門

いさごもに穂麥喰はむ草枕

桑門とは坊主の事。

旅中で僧旅と道で落ちあつた、御出家よ、いざ一緒に穂麥でも喰はうぢやないか此野宿で、といつたのに過ぎぬ。穂麥が其儘喰はれるものでもないが、唯だ佗ひたる自己と雲水の僧との情懷を叙述したのである。

五月十一日武府を出でて故郷に赴く人々川崎まで送り來りて餞別の句をいふ其のかへし

麥の穂をたよりにつかむわかれかな

五月の十一日に江戸を出て故郷の伊賀の國へ赴くときに人々大勢東海道川崎の宿まで送つて來て餞別の句をいふたので、自分も其のかへしの句を作つたといふ前書。

折ふし麥が穂に出る頃であつた、其の麥の穂を頼りとしてつかまへるやうな此別れの心持であるかな、といふので、即ちわかれに臨んで體もよろつき力なさの餘り麥の穂を便りにつかまへて踏み止つたと、其時にあつた麥の穂に事よせて別れの情を叙したのである。裏面には自分は老衰にも近く又た旅に出ては頼りも少ない、今迄は諸君に助けられたが、これよりは嘸ぞ困苦することであらうといふ意

をほのめかしてゐる。麥の穗を頼りにつかむといふのは着想も奇警であつて別れの情懷も充分に言ひ盡されてゐる。

麥の穗やなみたに染て啼雲雀

麥は伸びて穗に出た、雲雀は啼いてゐる。其の雲雀のなく涙が染めなして麥の穗の色になつたのぢや、と言つたので、麥の穗をといふべきを調子の爲め麥の穗やとしたのである。これも前の句と同樣送別のかへしと見える。雲雀の涙が麥の穗を染めなしたとは一寸奇拔な着想ぢや。

悼大巓和尚

櫻戀ひて卯の花拜むなみたかな

大巓和尚といふ人が死んだのを悼んだのぢや。

自分は梅を戀ひし〳〵思ひなしてゐる、それに今まは卯の花を拜むやうになつた、拜んで涙を流す事であるわい、といふ意で、裏面には矢張り和尚の性行を梅とも見、高潔なる梅が散つたのを和尚の死に比し、それを自分が戀しく思ふから同じ色の卯の花を責めてもの形見として拜むのぢやと其季節の物を持ち來つて哀悼の情を叙したのである。

其角か母五七日追善

卯の花もはゝなき宿そすさましき

其角は門人、その母の三十五日忌の追善の爲め作つた句。

其角の母が亡せて淋しくつまらなく思ふ其の情懷を思ひやりて、それを直ちに自分の情懷として、卯の花も母のない宿は如何にも荒涼としてすさまじい事ぢや、と言つたのである。個樣な心持を叙する場合には句の主人公は自分が他人かは强ちに穿鑿するの必要はな

い。初心者は兎角それを穿鑿したがるがよく〳〵注意して可。

卯の花やくらき柳の及ひこし

卯の花がさいてゐる、一方に柳の枝が長く垂れてゐる、時は夕ぐれの薄闇いそら、卯の花は白く分明なるに反し柳は闇くぼんやり見えて、其形が恰かも人の及び腰をしてゐるやうに落付かぬ有樣であると、卯の花と柳とを對比して其景致を叙し、且つ闇きの一語で夕ぐれか霄である時刻を現はしてゐる。一寸よい感じがするが、及び腰の語は少し意に滿たぬ所もあるかに思はれる。

尾張より東武に下る時

牡丹蘂深くわけ出る蜂の名殘かな

尾張の國に居たのが是から江戸へ行くので其時に作つたといふ前書。

牡丹の花しべは花の大きいだけ特に深いものである、其の深い蘂を蜂がわけ出て牡丹に對し名殘惜しい趣があるといふのが表面の解、さうして裏面には尾張の同人門弟などにいろ〳〵厚遇されたが今から別れて立去る事ぢや、といふ情を含めて、自己を蜂に比喩し蜂の牡丹に對する名殘を自己の尾張に對する名殘にほのめかしてゐる。是れも貞享以前の口氣。

桃隣新宅自畫自賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

桃隣の門人、それの新宅祝ひに行きて芭蕉翁自ら畫き且つ自ら賛をした其句といふ前書。

これは芭蕉翁自身が蜂になつて見た心持で、自分が蜂になり牡丹の花に這入ると、さすが立派な花だけに花の蜜の露も暖かく感ずる、

牡丹の花の蜜は誠に寒からぬ露ぢやといふ意で、裏面には桃隣は富んで居て新宅の立派なのが出來たので、それを富貴の花に比喩した意も含むでゐると見てよい。

大阪にて

燕子花語るも旅のひとつかな

燕子花の花の趣を語りあふも亦た旅情の一つぢや、といふ意で、燕子花の季節大阪で誰れかに逢つて話しでもした時の句であらう。業平の歌に遙るゞ來ぬるとある處より旅の一つといふ事が出て來たものか。

山崎宗鑑屋敷にて近衛殿の宗鑑が姿を見ればかきつばたと遊ばしけるを思ひ出でて心の中にいふ

有かたき姿おかまむ燕子花

山崎宗鑑の屋敷で、近衛公が宗鑑の姿を見ればかきつばたと戯れに遊ばされたその句を思ひ出して心の中でいふたといふ前書じや。心のうちにいふとは近衛公は貴人であるから、ひそかに此句を作ると謙遜して言ふたのぢや。攝家雲上の人であり乍ら風流に心をよせらるゝ有り難い思召の近衛公の姿を拜みたいものぢや此の燕子花を見るにつけてといふやうな意であつて、燕子花から偶〻近衛公を思ひ浮べてそれを欽慕して咏じたのぢや。近衛公の句は唯〻燕子花を餓鬼と音通を以て宗鑑を揶揄したに過ぎないが、芭蕉翁のは實景上燕子花の花の美しく品致ある處を近衛公にたとへて咏じてゐる。近衛公時代には多く斯樣な言葉などにのみ趣向を弄し駄洒落を事としたのぢやが、芭蕉翁のは純然たる詩的の句となつてゐる。俳風の變遷が此兩句を比較しても分かるのぢや。

鳴海知足亭

かきつはた我れに發句の思ひあり

鳴海の宿で知足といふ人の亭で作つた句。

かきつばたの咲いてゐるのを見て、偶然興を發したのを其儘に叙したので、今まかきつばたに對して自分は發句をして見やうといふ思ひが起つた、といふに過ぎぬ。併し裏面には矢張知足の待遇の厚いのを燕子花に比して爲めに面白い興を發したといふ挨拶も含んで居らう。

歸庵

夏ころもいまた虱をこり盡さず

旅から庵に歸つて來ての句。

旅から歸りはしたもの〻、其の着て居た着物の虱も未だ取り盡さない、殆んど歸つたばかりで着物も其儘であるといふやうな意ぢや。

或いは歸庵を門人達に通知してやつた句でもあらうか。

わかれはや笠手にさけて夏羽織

人とわかれる場合の句と見える。即ち笠を手にさげて夏羽織で其儘に旅立ちわかれてゆくといふ當時の狀況を言つたのである。唯だ少し疑ふ可きは、夏羽織を着るのは其當時では俗間の人のみであつたらうに、僧體でゐる芭蕉翁が夏羽織を着るとは頗る不似合な感がある。或ひは芭蕉翁が或人を送る時に其の送らるゝ人が笠を持ち夏羽織を着て居つたので、それを言つたと見るのが適當なやうにも思はれる。さうすると別ればや即ち別れましやう、サア笠手に提げて夏羽織をお着なさい、といつたやうな心持に見るのぢや。

大垣の城主君　日光御代參勤させ玉ふに扈從する岡田氏何

某に寄す

篠の露袴にかけし茂りかな

大垣の藩主が將軍の御代參として日光へ參詣をする、その大垣藩公のお伴をする氏は岡田名は某に寄せる句といふ前書ぢや。

日光山は夏の事であるから篠などが茂つてゐるであらうが、御供をして其茂りの中を行く時には袴に篠の露がかゝるであらうと、いふのを現在にかけしと言ひ切つてしまつた、茂りかなは唯だ篠のみでなく汎く竹木の茂りをいふので、其邊全體を意味してゐるのぢや。裏面には君公のお供の事であるから嘸ぞ御骨折であらう、といふ意を含み、而かも忠義の武士の君公に供する樣が言外に現はれゐて、普通の人を送るのと違ひ、句の趣が頗る氣力に富んでゐる。芭蕉翁にあらずんば此變化は出來ぬ。

嵐山籔の茂りや風の筋

場所は京都の嵐山下で籔が茂つてゐる、其れへ風が吹く、籔が風に靡く、從つて其の風の筋が籔に見えるといふので、籔の茂りにはよく斯樣な景色がある、印象の明瞭な句で、籔が風に動くのが目に見えるやうぢや。

須磨

須磨寺に籟かぬ笛きく木下闇

須磨での句で、須磨寺へゆき木下闇に居て昔しを偲びつゝ居ると、敦盛の笛の事を心に思ひ浮べた、すると誰れも吹かぬのに何處からともなく笛の音が微かに聞えるやうに思はれた、といふのを現在に聞いたといつたのぢや。籟かぬ笛といふのに何となく昔しを思ひ出でて髣髴たる幽魂の目前を往來してゐるのを見る心持がある。情を

以て勝つた句ぢやが、全體の着想は平凡である。

雲岸寺

木つゝきも庵はやぶらす夏木立

夏木立か茂つてゐる、木つゝきが居る、庵がある。その木つゝきは木はつゝくが流石に夏木立の中の庵は破らぬ、といふので、如何にも淋しげに木が茂つてゐて細さい麁末な庵と住人の佗びたる樣が目に浮ぶ。庵はやぶらずとは理窟らしいけれども、ソンナ事は決してあり得べからざる事を態々いふのだから最早理窟を離れて全く詩的興味に化してゐるのぢや。

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立

幻住庵は有名な芭蕉翁の記事のある庵で、近江の石山寺の奥にあつたのぢや、今も其跡を存してゐる。

此句は芭蕉翁が幻住庵に初めて住んだ時の句で、自分の是から住はうとする庵を見ると先づ目に入つたのは椎の木、此の木かげで涼しく涼む事も出來るよ誠に心うれしい、といふ意味であつて、第一に椎の木ぢやが猶ほ其他周邊の夏木立も亦涼しげで頼もしく思はれるといふ餘意もある。即ち椎の木も夏木立の中ぢやが特に抽出し、更に夏木立と言て全體を總合したのである。又此句は幻住庵先住の法師を慕ふた意も多少あらう。

別舊友

二またにわかれそめけり鹿の角

舊友に何處かで別れる時の句ぢや。

時が恰も夏の季で鹿の子が生れて角ぐむ頃である、次第に角がめぐ

みて二たまたに分かれ出したと言ひ、友人と別れて前途が二たまたになりゆくといふことに比喩したのぢや。或る追分の辻で別れたのでもあらうか。又この言葉つきは滑稽洒脫で如何にも二人が打笑つて別かれた有樣が想ひ遣られる。

子規なくや黑戸の濱庇

黑戸は海岸。濱庇は海岸の家居。それで黑戸の海岸の濱庇で子規がないた、といふ即興の句、何となく子規と場所の配合上に感がある。

○橘やいつの野中のほとゝぎす

野の中に橘がある、其のほとりで時鳥が啼いたといふ是も橘と子規の配合に過ぎぬが、其の橘を單に野中の橘とせずに、何時の野中と言つたのは何の代の橘であらうか、何人か立派に時めきし時其庭にあつた愛木であらうか、と想像し、橘のみか時鳥も昔しの形身なるらしく思ひなして、一種實景以上の興を添へたのである。又た叙法に於ても先づ橘やと呼出し、其の橘が何時のであらうといふのを單にいつのと言つて餘韵を存し、尙ほ下の野中へもかけて何時の野中だらうか、何時代を經て野になつたものであらうか、といふ事なるので、即ち橘も時鳥も何時代の形身かと雙方に利かせた所などは頗る働いてゐる。いつのの三字が最も價がある。こゝらが修辭上の熟練な所で、氣をつけて味ふ可きぢや。

鐵蓋か峯に上る　二句

須磨の海士の矢先さに鳴や時鳥

鐵蓋ヶ峯は、攝州一の谷の傍の山で、源平戰爭に關係のあつた名のある山ぢや。此句は須磨の海士が弓を引く、其の矢先きに當つて命を失ふかと悲しみ鳴いてることよ時鳥が、といふ意、裏面には義經が

坂落して攻めよせて平家の公達の恐れ悲み逃げ惑ふ有様を思ひやつてゐる所がある。趣向の取方が一ッ變つてゐて面白い句ぢや。海士が弓を射るのは一寸珍しいが、一本に翁が實際に見たと前書がある。

ほとゝぎす消えゆく方や島ひとつ

ほゝとぎすが鳴く、其の聲が消えて行く方を見やれば向ふに嶋が一つ見えるといふので、濱邊から海上へ時鳥の啼きゆく方を見渡した句ぢや。全く客觀の句であるが、これも裏面には平家が兵船にうちのりで波路遙かに落のびた趣を寓してゐる。此句も亦た頗る穩かに言ひて穴勝ちに懷古らしくない所が却て面白い。唯だ消えゆくとのみ言つたのは少し時鳥としては如何ぢやが、それも平家の行衞に比する心持があるから妨げぬ。

裏見の瀧

時鳥うらみの瀧の裏おもて

日光の裏見の瀧ぢや。此の瀧は誰れも知つてゐる通り高い岩上より落下し、裏も見られる瀧である。それで時鳥は瀧の表で鳴き又た裏へまはつて鳴いてゐるといひ、裏見といふより裏表の趣向を取つたので、實際に時鳥は果して表裏に鳴くか否かはわからぬが、それは穿鑿するに及ばぬのぢや。先頃の大洪水で此の瀧もつぶれて裏から見られぬやうになつたといふから、今日の時鳥は面白い飛び場所を失つた譯ぢや。

みちのく一見の桑門同行二人那須のしのはらを尋ねて、なほ殺生石見むといそき侍るほとに雨ふりけれは先此處にとまり候

落ちくるや高久の宿の時鳥

みちのく一見の桑門二人とは芭蕉翁と曾良と二人が陸羽見物に同行したそれを他人事のやうに斯樣に書いたのちや。又た全體の前書文が謠曲に似せて頗る滑稽を帶び洒落に書き做した所、芭蕉翁の面目か躍如としてゐる。

さて句の意味は高久の宿で聞いた時鳥の鳴き方がさも高き空から落ちてくるやうぢやと言つたので、所の名が高久であつたから落ちくるやと言つて其時に取つての興を歌つたものであらう。或いは高久の宿には謠曲などの故事があるかも知れぬが左樣な事は無いとしても此句は解せられる。

那須野にて

野を横に馬ひきむけよ時鳥

那須野ヶ原を馬に乘つて横ぎつてゆくと、右か左りか兎も角も横手の方で時鳥が啼くのを聞いた、それで不圖其方を向いて其聲を聞いたといふのを興じて、時鳥を聞くから馬を横に引むけて呉れよ馬方よと言つたので、實に思ひ切つた叙し方である。而して時鳥の下五字は馬方にいふ言葉以外別に其場合を現はしたのである。

○時鳥聲横たふや水の上

大川か湖水かの上でなく時鳥を叙したので、其の鳴聲が水の上に横はつてゐると誇張して言つたのである。元來時鳥といふものは形が小さくて多く夜のものであるのに、昔しから歌人などの注意をひき、其聲も頗る仰山に大きな物のやうに言ひなされてゐる。此句は又たそれを一層大きく咏じたものであつて、後世蕪村が時鳥平安城をすじかひに、などと言つたのも矢張此邊の消息から來たのであらう。

一聲の江に横ふや牡宇

此句は前の句を言替へたに過ぎぬ。牡宇の一聲が江一面に横はつたといふのだ。試に此兩句を比較して見ると一聲の江に横はるといふのは、大きく現はさうとして却つて細工に落ちた處が見えるが、前の句の方は飽迄も大まかに言つてゐるので、其不調法なだけそれだけ大なる景色をあらはしてゐる。前句の方が勝つてゐると言はねばならぬ。修辭上一ッの意を留む可き所である。

附記、京華日報が到達して碧梧桐氏の續俳活斷片を見れば、芭蕉翁は當時に於て既に此二句を沾德に判定せしめて遂に水の上の方を取つたとある。今更ながら元祿の文學眼には敬服の外はない。

京にても京なつかしや時鳥

京で時鳥を聞くと京がなつかしく又其啼く時鳥もなつかしいといふので、即ち京都で聞く時鳥も亦た一種の哀れがあるわいとの意ぢや。

或いは時鳥が蜀帝の魂で不如歸と啼くと云ふ故事から京に居て聞いても其京を慕ふ聲に同情して我れも居ながら此京がなつかしく思はれる、といふ解も出來るが、それでは全く理窟臭くなつて惡句となるから芭蕉翁の爲めに取らぬ。

嵯峨にて

時鳥大竹藪をもる月夜

これは京都の西、嵯峨の里での句。嵯峨は竹藪の多い所で今でも此の景色を見られ得るやうぢや。即ち時鳥が啼く、其の方には大竹藪が茂つてゐる、其の藪の中へ月光が漏れて明るくなつてゐる、といふ夜景で、心地のよい句ぢや。又た漏る月夜の五字が如何にもシッカリして能く据はつてゐる。

時鳥なくや五尺のあやめ草

時鳥かなく、傍らにはあやめ草が早や五尺ほども高く伸びてゐる、といつたので、實際あやめは五尺あつたのではないが唯だ高く伸びたのを五尺もあるであらうと思ひそを直ちに五尺と言切つたのである又た五尺のあやめと言つたので自然時鳥も大きく聞きなされるのぢや。

さし竿かきたる扇に

鳥さしも竿やすてけん時鳥

鳥さしの持つ竿のみを書いた扇の賛ぢや。

此句は戯れてゐる句であつて、時鳥の聲をきくと感に堪へぬ、それで鳥さしの職業者も竿をなげ出したであらうといつたのぢや。若しこれを無風流な荒くれ男さへも彼の時鳥に對しては萬事を忘却してしまふなどと強く言ふと理窟に落ちて全く價のないものに成るが、唯だ鳥をさゝんとしてゐる男が時鳥の聲を聞いて茫然自失してゐる體を見たとすれば多少可笑味を帶びて興を與へ得る事になる、併し竿やなげけんの言葉は多少人をして思慮を用ひしめるから、頗る奇險な句である。

仙臺にて

田や麥や中にも市の時鳥

田がある、麥畑がある、その先きは市町で人家になつてゐる、といふやうな所を過ぎつゝ作つた句であらうかと思はれる。即ち田や麥やは、野原の景色、其の野原の景色に對して聞いたのよりも市町で聞いた時鳥が就中面白い趣があるといつたのぢや。田や麥やの二ツのやの字を使用してゐる所も言葉が引立つてゐる。

あけほのや未た朔日に時鳥

或る朔日の夜の引あけに時鳥を聞いて作つたものと見える。あけぼのは夜の引あけで、そのあけぼのにまだ朔日であるにも拘はらず時鳥がないた、時鳥もいろ〳〵の場合に聞くが、此の朔日の夜の引あけに聞いた時鳥は殊にうれしいといふ意で、勢の強い句ぢや。未だ朔日といふのは時鳥はよく月に配合されて有明の月ぞ殘れるなどとも歌はるゝ處より今日は未だ朔日即ち無月であるのにと戯れた心持もあるであらう。

不ト一周忌琴風興行

○時鳥なく音や古き硯箱

不トといふ男の一周忌に琴風といふ男が俳句の興行をやつた、其の俳席での句といふ前書。

何れ俳席の事であるから硯箱も出てゐたらう、其の硯箱は亡き人と

共に俳興に使用した硯箱であると假定して古き硯箱と言ひ、その硯箱に就いて亡き人を思ひ出す手段をしたので、時鳥が鳴くよ、其の聲は此古き硯箱に感慨をよせて居るのぢや、と時鳥に意あるが如く云ひなして、裏面には今ま俳席に連なりそゞろ古人を思ひ起すといふ意を含めてゐる。餘韻餘情を以て勝るといふべき句。

ほと〳〵きす啼〳〵飛そいそかはし

一つの時鳥の有樣に就て興じたので、時鳥が鳴き乍ら飛んでゆく、ゆる〳〵枝などにとまつて鳴いてもよさ〳〵うなものを如何にも急がしいぢやないか、と時鳥に戯れたのぢや。

〃木隱れて茶摘もきくや時鳥

山城宇治あたりの句であらう、茶を摘む人があちこち木蔭にゐる、時鳥が啼いてゐる。茶を摘む人は茶の木に隱れ乍ら時鳥を聞いてゐ

る、といふ客觀の景色を重もに現はしてゐる、もの字は茶摘みふぜいの者でもといふやうな心持もあらうが可成言葉のゆとり位と見て置くが好い。

附記、賴政集に、大内山の山守は木隱れてのみ月を見るかな、とあるのを思ひ出して、宇治の關係上其言葉を借りたのらしい。

烏賊賣の聲まぎらはし時鳥

これも時鳥の鳴音につきて戯れに作つた句と見える、時鳥が鳴いてゐる、折から烏賊賣が烏賊の賣聲をあげて通る、此二つの聲が何れを何れと頗るまぎらはしく判じ難いと興じたので、當時の烏賊賣の聲の可笑しかつたのをも連想される。

以上時鳥の句を見るに、殆んど縱横無盡であつて、樣々の方面より樣々に興じてゐる所は芭蕉翁の非凡なのが知れる。殊に芭蕉翁は時鳥に於て得意であつたやうに見える。

駿河國に入りて

駿河路や花たちばなも茶の匂ひ

此句は旅路を駿河へ這入つて見ると折ふし橘の花もさいてゐた、又茶を焙じる時候で其匂ひもしてゐた、といふことゝも見られるが、中七と下五との文段から見ると、橘の花がさいてゐるといふのは現實で、茶の匂ひとは茶を焙じてゐるのでなく、茶を飲んだ其の出花の匂ひに橘の花の香が似通つてゐると言つたのであらう。駿河は茶の名所とでもいふ處から斯樣の配合を取つたものか。

落柿舍

柚の花に昔を偲ぶ料理の間

落柿舍は京都の西の嵯峨にある去來の別墅の名である。此の家は曾

てよしある人の家であつたのを去來が買入れて住んだとある。其處で料理の間の傍らに柚の花のさいてゐるのを見るにつけて昔し住みし人のそゞろ偲ばれる、といふので、柚は花も實も料理につかひ且つ其の香のあるものだから此趣向が出たのであらう。

道芝にやすらひて

こんよりと樗や雨の花くもり

道芝は道の傍らの芝、其の芝の上に休息して此句を作るといふ前書。道ばたに樗の花が咲いてゐる、だん〳〵雨を催して來て空は曇つてくる、曇ると共に樗の花も其曇りの中にどんよりとしてゐる、といふ景色で、櫻の花によくいふ花ぐもりを樗の花に持來り、其の樗の花ぐもりの間へ雨のと入れて句を曲折させたのぢや。夏のはじめ樗のさく頃によくありさうな景色で、雨ぐもりは別してそれを現すに

好適な場合ぢや。

白けしや時雨の花の咲つらむ

瞿麥の花の白いのを見ると、如何にも淋しい趣がある所から、これは彼の冬の淋しい時雨が草になつて斯樣な瞿麥といふ花に咲いたのであらうか、と興じたので、實際そんな事のあるわけはないのを詩的理想で言つたのである。理窟をはなれた無邪氣な處はあるが去りとて佳い句とも思はれぬ。或る宗匠達は得てコンナ句に別義を附會して芭蕉派俳道の秘訣などと騷ぐのである。

贈杜國

白けしに羽もく蝶のかたみ哉

杜國は芭蕉の門人で大變に芭蕉が可愛がつたものと見える。白けしの花に蝶が羽をもいで留いて去る、其羽が形身であるよと言

つたので、白けしの花の瓣と蝶の白い羽とは似通よつてゐる所から斯樣な理想を試みたのであらう。裏面には此句を作つて形見として君に與へる、といふ意を含むでゐるのぢや。

須磨

海士の貌先つ見らるゝや瞿麥の花

須磨の海邊の景色で、海士の貌が先づ眼に入つた、瞿麥の花もそこに咲いてゐた瞿麥の花に對して海士の貌も面白く眺められた、といふ程の意味で、一の客觀の句として見るのぢや。文字の上より穿鑿すれば、先づ見らるゝやの七字ある爲めに、或いは名所の海士の貌は瞿麥の花よりかも床しいとか、又は海士の黑き貌が白き瞿麥の花に對して目立つて見えたとかも言はれるが、左程にこまかく穿鑿せずと唯だ海士と瞿麥と雙方を見た時不圖海士の貌が先づ目に入つたといふ位にして置くのが穩當であらう。

岱水亭

雨折々思ふことなき早苗哉

岱水といふ人の宅での句。

雨が折々降つてゐる、早苗は雨の降るので少しの心配氣もない樣に青々と生長しつゝある、と言ふので、百姓の心配氣もなく安らかに思つてゐる所を早苗にて現はし、早苗を擬人法にして早苗自身が何事も思ふ所なく元氣よく生育しつゝあると言つたのぢや。

芦野

田一枚植ゑて立去る柳かな

百姓の田面で働いてゐる樣を咏じたので、一枚の田を植ゑて百姓共が歸つてゆく、其の邊りに柳の木が枝垂れてゐた、といふので全く

客觀の景色であるが、又何となく百姓生涯の氣樂な處も連想せられて如何にも感じが好い。一枚の二字最有價。流れの柳といふ故跡もあるさうなが、それは寧ろ考がへぬ方が好い。

奥州今の白川に出二句

西か東かまつ早苗にも風の音

奥州に昔し白川といふ名所があつたが其跡は堙滅してさだかならず、現今白川と唱へてゐる地へ出で來たといふ前書。句の意味は西であるか東であるか一向に方角が立たぬ。折柄風が吹いて來て先づ道傍の田の早苗にも音がした、といふ意で、東西が分らぬといふ裏面には昔の白川の關はどこであらうかと思ひ遣る意をも含み、又能因が秋風ぞ吹くと詠んだ處より夏の早苗の風を比對せしめて、故跡は分らぬが先づ風だけは吹いて來たと興じた處もあらう。

早苗にも吾色くろき日數かな

早苗の伸ぶ頃で夏の日もやゝ強く感ずるやうになつた、旅人たる自分は早や顏の色が黑くなつたわい、個樣に日數が重なつて、といふ意である尤も顏色の事をいつたのは矢張能因の吾が顏を日に晒して態と黑めた故事から來てゐるのだから、早苗に對しても日數を經れば隨分色は黑くなることが出來るわいと、戯れた心持も暗に含んでゐるのであらう。

みちのくの名所々々心にとめて、先づ關屋の跡なつかしき

まゝに、ふる道にかゝりて、今の白川も越しぬ、頓て岩瀨郡に至て、乍單齋等窮子の芳扉を押、かの陽關の出て故人に逢ふなるへし

風流のはしめや奥の田植うた